

---

# 遥かなる旅

白波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遙かなる旅

### 【Nコード】

N1484X

### 【作者名】

白波

### 【あらすじ】

フタバタウンに住む少女、マオとアキはナマカマド博士にポケモンをもらって旅立つ。方向音痴のマオと異常なほど心配性のユキ。二人はそれぞれ目的を持って旅をするが5年前に起きたある事件を巡り世界を揺るがしかねない事態に巻き込まれて行く…。これはそんな二人の物語である。この物語はサトシがイツシュ地方を旅している頃から始まります。

## 第一話 旅立ちの朝

ポケットモンスター縮めてポケモン

この世の不思議な不思議な生き物

あるものは山に海に空に大地にと様々なところに生息している

ポケモンの数だけ出会いがありポケモンの数だけ別れがある

この物語はそんな世界に住む二人の少女が出会いと別れを繰り返して成長してゆく旅の記録である

シンオウ地方 フタバタウン

この町に住む少女マオは朝起きると自室の窓を開け太陽の光と心地よい風を受ける。

「今日はついに待ちに待ったポケモンがもらえる日なんだから気合を入れて行かなきゃ！」

と言うとマオは階段を下り

「ママ！おはよう！」

とあいさつをしてから食卓に置いてあるパンをトースターに入れる。

マオが焼きあがったトーストを食べ始めると横で母のポケモンであるポッチャマがマオが出したポケモンフーズを食べ始める。すると母があくびをしながら起きてくる。いつも通りの日常の風景だが今日からは旅に出てこの家を離れるのでしばらくは見れないだろう。

トーストを食べ終わるとマオは「初めてのポケモン」というタイ

トルの本を読みながら一緒に旅立つと約束したユキとの待ち合わせの時間を待っていた。

本を読んでいたマオがふと顔をあげると掛け時計の時計の針は約束の11時を過ぎて12時を指していた。

「しまった！」

と言うとマオは急いでそばに置いてあったシヨルダーバックをつかみ「行つてきまーす！」

と言い家を飛び出した。その後ろ姿を見て母は

「まったく…本を読んでいるときは何を言っても聞かないうえにいつもこうなるのよね…。」  
とつぶやいていた。

その頃フタバタウンの入口では…

ユキは約束の時間の30分ほど前に集合場所に来たが約束の時間を1時間過ぎてもマオが現れないためあっちへこっちへうろろしながらマオを待っていた。

ユキの妄想

マオちゃん遅いよな…どうしたんだろ…まさか！ここに向かう途中で悪い人に捕まったとか！？だとしたら電話とか来てて…いや…もしかしたら悪い人たちに…それとも…私が時間を間違えてマオちゃんが行つちやっただとか？だとしたら早く追いかけないと…だとしたらマサゴタウンだけど…そこに行く途中で変なポケモンに連れ去らわれて人質にされたりとか…

ふたたびマオ…

マオはフタバタウンの町中を全速力で走っていた。

入口の方へ来て人影が見えてくると

「おーい！ユキちゃん！」

と声をかけた。するとユキは

「マオちゃん！よかった！無事で！」

と言いながら駆け寄ってきた。

「どうしたのよ！？ユキちゃん？」

とマオが言うとユキは

「だって！マオちゃんがあんまり遅いから悪い人に誘拐とかされてどこかに行っちゃったんだと思っただけだから！」

と言った。

「あのお…ユキちゃん…そんなことあるわけないでしょ…本を読むので夢中で遅れただけよ…」

とマオが説明するとユキは

「本当にそうなの？なんか大げがしてまともに動けないのに無理してきたとかそういうのじゃないよね？だったら家で…」

と言いかけたがマオが

「だーかーらー！本を読んでたら時間が過ぎてたの！」

と言うとユキは

「そうならいいんだけど…無理しないでよ…」

と一応納得（？）はした。

「とにかく！行こう！マサゴタウンへ！」

と言ってマオが歩き出そうとすると

「待って！」

とユキが呼び止めた。

「どうしたの？」

とマオが聞くとユキは

「もしかしたら…フタバタウンを出た瞬間ポケモンに襲われて持ち物全部持ってかれて拳句の果てに宇宙人に…」

と言いだしたがマオは

「大丈夫だから！行くよ！」

ととどどん負のスパイラルが加速するユキの手を引き201番道路をマサゴタウンの方向へ歩き出した。

...^UUU

第一話 旅立ちの朝（後書き）

こんにちは！白波です！

これからよろしく願いします。

## 第二話 シンジ湖からマサゴタウンへ

マサゴタウンのナマカマド博士のところに行き、ポケモンをもらいに行くためフタバタウンから旅立ったマオとユキはなぜかシンジ湖に来ていた。

「あのさ…」

とユキが言うとマオは

「なに？ユキちゃん？」

と聞いた。

「もしかして…マオちゃんって方向音痴？」

とユキが言うとマオは

「そっそんなわけじゃないでしょ…あはは…」

と言った。するとユキは

「そうじゃないとしたら…もしかしたら…マオちゃんはわざと私をここに連れてきて悪い人たちに合流して…」

言いたしたがマオが

「だーかーらー！悪い人とかそういうのはそうじゃないから！まったくもう…ユキちゃんったら…ちよつと旅立つ前にこの湖見ておきたかったのよ…」

と言いながら湖のほとりに歩いて行った。

「ユキちゃんもおいでよ！」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…湖に近づいた途端岸が崩れて湖に落ちて…」

と言いたすがマオは

「心配ならそこで座ってなよ…」

と言って湖のほとりに座った。

（おかしいな…マサゴタウンはこっちだと思ったのに…私が方向音痴とかは断じてないはずだから…ちよつと道を間違えただけよ！と  
りあえず別の道を行けば着くかな…。）

と考えマオがユキの方に歩いていくとユキが

「あれ…。」

と言いながら湖の方を指差した。

「あれって？」

と言いながらマオが振り向くがただ湖が静かに波を立てているだけだった。

「何も無いよ！」

とマオが言うとユキは

「さっきなにかがいた…透明の…。」

と言った。

「なにか見間違えたんじゃない？とりあえずマサゴタウンに向かおう！」

と言うとマオはユキと共に湖を後にした。

マサゴタウン

昼間にフタバタウンをでた二人は日もすっかり暮れた夜になってマサゴタウンに着いた。

「やっと着いたね！」

とマオが言うとユキは

「マオちゃんが寄り道ばかりするからね…もしかしたら…ポケモンをもらえらえる日を一日間違えていたりしてそれをごまかそうとして…いや…マオちゃんはそんなことしないから、やっぱり…」

と言いだすがマオは

「とにかく！ナマカマド博士のポケモン研究所に行こう！」

と言ったがユキが

「もしかしたら…こんな時間に行ったりして怒られて拳句の果てにポケモンももらえず…警察に追われる身になったりとか…」

と言いだすと

「警察には追われなと思うけど…確かにこんな時間に行ったら迷惑ね…ポケモンセンターに行きましよう…」

と言ってポケモンセンターがあるであろう方向へ歩き出した。

一時間後…

結局マサゴタウン中を歩き回った結果ようやくポケモンセンターに着いた。

「マオちゃん…やっぱり方向音痴なんじゃ…。」

とユキが言うがマオは

「だーかーらー！そんなわけないでしょ！今日はさっさと寝て！明日研究所に行くわよ！」

と言うと二人はジョーイさんに行って二人部屋に泊まることにした。ポケモンセンターは便利な施設でポケモンの回復を無料でやってくれるだけでなく旅をするトレーナーの宿としての機能も果たしている。また、地方によってはポケモンセンターの中にショップが併設されておりキズぐすりやモンスターボールといった旅をするうえで必要な道具がそろえられる。

次の日…

「こっちなかな…やっぱりこっち？」

とつぶやきながら地図を見ながら歩くマオの後をユキが歩いている。

「やっぱり迷ってるんじゃないの？」

とユキが聞くとマオは

「違っつて！こっちで会ってるはず…。」

と言いながら角を曲がると白髪に白いひげを蓄えたこわもての男性とぶつかった。

「すみません…。」

とマオが謝るとその男性は

「君たちは…ちょっときつちに来なさい…。」  
と言いながら歩き出した。

つづく…

**第二話 シンジ湖からマサロタウンへ（後書き）**

こんにちはー！白波です！

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願いします。

### 第三話 初めてのポケモン

マサゴタウンで迷子に「違う!」「マオちゃん誰に話しかけてるの?もしかしたら…」。「作者よ!作者!」…マサゴタウンを歩いていたマオとユキは途中で出会った男性の後ろを歩いていた。

「誰なんだろう…あの人…。」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…あの人とっても悪い人で私たちを…」

と言いだしたが

「だから!そんなこと言わない!」

と言ってそれを止める。

しばらくその男性について歩いていくと大きな建物についた。

「ここが、私のポケモン研究所だ。」

と言うとマオが

「私の…ってあなたナマカマド博士だったんですか!」

と言った。するとナマカマド博士は

「なんだ…君たち私が誰かわからないのについてきたのかね?」

と少しあきれたような顔をして言った。

研究所の中の案内された部屋に入るとそこにはモンスターボールが三つおいてあった。

「このモンスターボールにはシンオウ地方の初心者用ポケモンであるペンギンポケモンのポツチャマ、わかばポケモンのナエトル、こざるポケモンのヒコザルの三匹が入っている。」

と言いながらナマカマド博士はモンスターボールから三体のポケモンを出した。するとマオは

「私はヒコザルがいい!」

と言ってヒコザルを抱いた。抱かれているヒコザルはとてもうれしそうにしている。するとユキは

「わっ私は…ナエトル…。」

と言うとユキはナエトルを抱き上げた。ナエトルはもともそうだからだろつか？落ち着くのか、はたまた少しばかりおびえているのか、とてもおとなしくしている。その瞬間胸を張って選ばれると思っていたのかポツチャマはかなりショックだったらしくその場で固まってしまった。

「あっポツチャマが…もしかしたら…このままこの子が…」

とユキが言いだすがマオは

「まったく…ユキはいちいち心配しすぎなの！」

と言ってから

「博士！ありがとうございます！」

と言った。

「ところで君たちはこれからどうするのかね？」

とナマカマド博士が言うともオオは

「私は各地でジム戦をしたいと思います！」

と答えた。そのあとにユキが

「私は…コンテストに…」

と答えた。するとナマカマド博士は

「うむ！よろしい！それではこの町を出て北にあるコトブキシティへ向かうといい！そこでもうすぐポケモンコンテストが開催されるぞ！それにクログネジムがあるクログネシティも近いからな！それと後これはポケモン図鑑だ！ポケモンたちを大切に！」

と言いながらピンク色のポケモン図鑑を出した。

ポケモン図鑑にはあらゆるポケモンのデータが入っておりそのポケモンがどんなポケモンであるかだけでなく自分のポケモンの憶えているわざや能力なども見ることができる。

ポケモン図鑑を受け取るとマオは

「はい！」

と答えて研究所を出てコトブキシティへ向かった。

「ユキちゃん！ついに私たちもポケモンがもらえたね！よし！張り切って行こう！」

とマオが言つとユキは

「もしかしたら…旅の途中で大けがして二度とおうちに帰れないかも…それならまだしも…もっととんでもないことに巻き込まれて…」  
と言いだしたがマオが

「ユキちゃん…考えすぎだつて…ほんと、昔から変わらないよね…旅をしたら少しは変わるんじゃないの？」

と言つた。それに対しユキは

「旅で自分を変える…もしかしたら変わりすぎてみんな私が誰かわからなくなるかも…でもそれだけならまだしも…」

とふたたび言いだしたがマオは

「まあいいか…」

とつぶやいて二人で仲良く歩いて行つた。

ポケモンももらったが二人の旅はまだ始まつたばかりだ！

つづく…

「おーい！そつちはフタバタウンの方向だよ！」

と助手に呼び止められマオは

「あつ！北つてこつちだった！」

と言つて今度こそコトブキシティの方へ歩き出したのであつた。

つづく…

### 第三話 初めてのポケモン（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

第三話にしてようやく主人公がポケモンを持ちました。

これからもよろしくお願いします。

#### 第四話 ライバル登場！マオ対ユウキ

ポケモンをもらい旅に出たマオとユキはポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かう途中近道をするため森の中を歩いていた。

「マオちゃん：こっちで大丈夫なの？もしかしたら：このまま一生この森から出られないんじゃない？：やっぱり地図に書いてある道を通った方が：でもそっちを通っても突然悪い人に襲われて：」

とユキが言いだすとマオは

「大丈夫だよ！こっちから行けば絶対に近いから！」  
と言いながらさらに森の中を進んでいった。

しばらく歩くと同じように森の中を歩く少年とであった。その少年はマオ達を見るなり

「お前たちポケモントレーナーか？」

と聞いた。マオが

「ええ…。」

と答えるとその少年は

「だったらバトルしようぜ！俺はミオシティ出身のユウキだ！お前は？」

と言った。

「私はフタバタウン出身のマオです…私、旅に出たばかりでポケモン一匹しか持ってないんだけど…。」

とマオが言うとユウキは

「別にいいぜ！それじゃあ一対一でどうだ？」

と聞いた。マオが

「もちろんです！ユキ…審判頼める？」

と言うとユキは

「ええ…でも…もしかしたら…審判やったはいいけどわざが飛んできて大けがして…そんでもって…」

と言いだすがマオは

「わざあつたたりとかそうそうないから！やるならやって！」

と言つとユキは二人の間に立ち

「これから、フタバタウン出身のマオ対ミオシティ出身のユウキのバトルを始めます…使用ポケモンは一体どちらかのポケモンが戦闘不能になった時点で試合終了といたします…それではバトル終わり！じゃなくて…始め！」

とユキが言つとマオは

「頼んだわよ！ヒコザル！」

と言いながらヒコザルを出した。その対し相手は

「行くぞ！ムツクル！」

と言つてムツクルを出した。

「あのポケモンはムツクルね…。」

と言いながら図鑑をかざすと

『ムツクル むくどりポケモン ムクバードの進化前 群れを作ることで一匹の弱さをカバーしている。タイプはノーマル・ひこう』  
という解説が出た。

「ヒコザル！先手必勝よ！ひっかく攻撃！」

ヒコザルがムツクルに迫るとユウキは

「ムツクル空に飛んでよけてからつばさでうつ！」

と指示をだした。

ムツクルは空へはばたきヒコザルの攻撃をかわすとつばさでうつを放った。攻撃はヒコザルに命中し後に飛ばされた。

「ヒコザル！がんばって！」

とマオが声をかけるとヒコザルはゆっくりながらも立ち上がる。

「反撃よ！ひっかく攻撃！」

「ムツクルもう一度つばさでうつだ！」

「ヒコザル！かわしてもう一度ひっかく！」

ムツクルはヒコザルに向かってつばさでうつを放ったがヒコザルはそれをかわし低空飛行していたムツクルに攻撃を命中させた。

「ヒコザル！そのままムツクルにつかまって！」

とマオが言うとヒコザルはムツクルの背中につかまった。

「ムツクル！ヒコザルを振り落せ！」

というユウキの声を聞きムツクルは右へ左へ旋回するがヒコザルは離れない。

「ヒコザル！ひっかく攻撃！」

とマオが言うとヒコザルはひっかくを放とうとしたがバランスを崩してムツクルから落ちてしまった。

「いまだ！ムツクル！とどめのつばさでうつ！」

とユウキが言うとムツクルはヒコザルにつばさでうつを放ちつばさでうつを直撃されたヒコザルは倒れてしまった。

「ヒコザル…先頭不能…よって勝者ミオシテイ出身のユウキ…。」

とユキが言うとユウキは

「よくやったぞ！ムツクル…。」

と言ってからマオの方を向き

「いいバトルだったな…またどこかであつたらバトルしようぜ！もちろん！それまでにお互いもつと強くなってから！」

と言った。マオは

「もちろんよ！」

と答えるとユウキと握手をした。

「これで俺たちはライバルだな！またどこかで会おうな！」

と言うとユウキはさっきマオ達が歩いてきた方向に歩いて行った。

「さてと…私たちも行くか…。」

とマオが言うとユキは

「そうね…でも、もしかしたら…向こうに行つたらさらに迷子になつて…。」

と言いだすが

「迷子じゃないから大丈夫だよ…。」

とマオが言うと

「それならいいんだけど…。」  
と言いながらマオとともに歩き出した。

始めてポケモンバトルをしたマオ。結果は負けだがライバルのユウキとまた会うことを約束し二人の旅はまだまだつづく…

#### 第四話 ライバル登場！マオ対ユウキ（後書き）

こんにちは！白波です！

バトルのシーンいかがだったでしょうか？バトルの描写等は苦手なので読みにくかったかもしれません…。

これからもよろしく願います。

## 第五話 ロケット団現る（前編）

ユキがポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かっているマオとユキは森の中の小さな広間で昼食をとっていた。

マオはユキが作ったサンドイッチを食べると

「おいしい！やっぱりユキが作った料理は最高ね！」  
と言った。するとユキは

「それならいいけど…もしかしたら…賞味期限が切れて…」  
と言いだしたが

「食べる気がなくなるでしょうが！」

とマオが言うとユキは黙ってしまった。

「ところでさ…ユキって昔から変なことばかり考えるけど…もうちょつと明るく考えられないの？そう…ポジティブにさ！」

とマオが言った。

「ポジティブに…ポジティブに…私の作った料理はおいしいって言うってもらえて…」

「そうそう！そんな感じ！」

「それでもって…それで…変なものとか間違っ入れてマオちゃんか…」

とユキが言うとマオは

「ストツプ！また変な風に考えてるし…」

と言った。

「ごめん…やっぱりあれ以来…」

とユキが言うとマオは

「まあわからないこともないけどさ…」

と言った。すると森の中から突然ポケモンが飛び出してきた。

「あのポケモンは？」

と言いながらマオが図鑑をかざすと

『コリンク そんなこうポケモン ルクシオの進化前 体を動かすたびに筋肉が伸び縮みして電気が生まれる。ピンチになると体が輝くタイプはでんき』

という説明が出た。するとその少しあとから

「その子止めてくださいーい！」

と言いながら一人の少女が駆けてきた。

コリンクの近くにいたユキがコリンクを抱き上げるとコリンクは嫌がって右へ左へ抵抗する。少女はユキからコリンクを受け取ると「ありがとうございます…私アキといいます。」

と言った。

「私はマオです！」

「私は…ユキ…。」

と二人がそれぞれ答えるとアキは

「マオさんにユキさんね…二人ともよろしく…。」

と言った。

「ところでどうしてコリンクが逃げてきたんですか？」

とマオが聞くとアキは

「はい…それが…コリンクと一緒にコトブキシティのコンテストに出ようと思って道を歩いていたら…突然変な三人組に襲われて…コリンクが先に逃げて行っただんです…。」

と答えた。

「その三人組って？もしかしたらとんでもない組織の下っ端とか？」

とユキが聞くとアキは

「さあ…あの人たちが誰だかさっぱり…。」

と言った。するとわかかのようなものが飛んできてコリンクを縛ってしまった。

「コリンク！いったい誰がこんなこと！」

とマオが言つと

「いったい誰がこんなこと！と言われても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやろう！」

と言うと男女三人が姿を現して

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリコ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私達！」

「我ら天下無双の」

「『ロケット団』」

と名乗るとその横からスカンプーとピッピが出てきた。

「ロケット団？何それ？」

とマオが言うとユキが

「聞いたことがあるわ…カントーを中心に暗躍する人のポケモンを奪う悪い人たち…。」

と言った。

「珍しいわね…。」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…目を付けられて、挙句の果てには…。」  
と言った。

「やっぱりこうなるのか…。」

とマオがつぶやくとエリが

「私たちの事…忘れてるでしょ！」  
と言った。するとマオは

「あっ！そうだった！あなた達！コリンクを返して！」  
と言った。それに対しダイキは

「返せって言われて返す奴はどこにもいねーよ！そんなじゃあポチっとな。」

と言ってボタンを押すと森の中から気球が出てきた。

「こら！待ちなさい！」

とマオが言うが三人と二匹はコリンクを連れて気球に乗ってしまった。

「それじゃあ！帰る！」

と言うと三人は気球で空へ飛んで行ってしまった。

コリンクがロケット団と名乗る謎の集団に奪われてしまった。マオはユキはそしてアキはコリンクを取り戻すことができるのだろうか？

つづく…

## 第五話 ロケット団現る（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ロケット団が名乗るときのセリフはDPの時のものを参考にしています。（個人的にDPの時ののが好きなので）

これからもよろしく願います。

## 第六話 ロケット団現る（中編）

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストの出場するため旅をしていたマオとユキはロケット団を名乗る組織に遭遇した。

「あいつらどこにいたのよ！」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…もう遠くの方に行つてて…コリンクは…。」

と言うがマオは

「そんなこと言わない！」

と言ってロケット団の気球を探す。

「コリンク！どこ？」

とアキが呼びかけるがコリンクの声は聞こえない。

「三人で分かれて探しましょう！」

とマオが言うとユキとアキはうなずいて三人はそれぞれ別の方向へ行った。

ユキが森の中を歩いているとムツクルの群れがいた。

「ムツクル…そうだ！」

と言うとユキは

「ナエトル！行って！」

と言いながらナエトルを出した。

「ナエトル！ムツクルのたいあたり！」

ナエトルは迫りいきなりの奇襲に驚いたムツクルの群れは混乱している。たいあたりはその内の一体に命中した。

「華麗に決めるわよ！モンスターボール！」

ユキが投げたモンスターボールはムツクルにあたり揺れ始めた。

「一回…二回…三回…」

とユキがつぶやいていると

カチッ！

という音とともにモンスターボールが止まった。

「やった！ムツクルゲットで心配なし！」

とユキが言くとナエトルが横でとても喜んでいた。

「出てきてムツクル！気球を探して！」

と言いながらモンスターボールから出すとムツクルは気球を探して飛んで行った。

「でも…もしかしたら…このままムツクルが返ってこなくて、逃げられちゃうかも…それならまだいいけどあいつらにつかまって…」  
と言いだしたユキを横でナエトルは半ばあきれた様子で見っていた。

ちょうどそのころマオが歩いていると先ほどの気球が見えてきた。

「あっ！あれは！」

と言つとマオは気球を追いかけだした。

「早い！」

気球

「あっ！あの子さっきの！」

とダイキが言つとエリが

「ここまで追いかけてくるなんてね…ダイキ何とかしなさい！」  
と言った。

「わーたよ…ポチツとな！」

と言つてボタンを押すと気球の高度は上昇した。

「こーらー！ここからじゃヒコザルの攻撃は届かないし…。」

と言っていると空を飛んでいた一匹のムツクルが気球を見て元来た方向へ戻って行った。

「なんなの？あれ…。」

アキはというと森の中を走り回っていた。

「あいつらどこに行ったのよ…。」

とつぶやくと群れで行動することが多いムツクルが一匹で飛んでいた。

「ムツクル？確か群れで行動するはずなのに…誰かのポケモンなのかな？」

と気になったことをつぶやいたがとにかく気球を探すことに専念することにした。

ふたたびマオ

「ハア…ハア…どうすりゃいいのよ…。」

と森の中で息を切らして立ち止まっていると先ほどのムツクルだろうか？ロケット団の気球に攻撃を始めた。攻撃を受けた気球は徐々に高度を下げていく。

「なんかよくわからないけど…チャンス！」

と言うとマオは気球が落ちて行った方へ走り出した。

しばらく走ると

「せっかくコジロウさん達にもらった気球が…。」

とダイキがつぶやくと

「また修理して使えばいいわよ…。」

とマリコが答えた。

「あなた達！コリンクを返しなさい！」

とマオが大声で言うがダイキは

「でも、これ修理費結構かかるんじゃない？」

と言った。それに対しエリは

「つべこべ言わない！あんたならなんとかできるでしょ！」

と答える。

「ちよつと人の話聞きなさいよ！」

とマオが言うとエリが

「なに？いたなの？」

と言った。

「いたわよ！コリンクを返しなさい！」

とマオが言うとエリが

「こっとなつたら力づくでも逃げるわよ！行け！スカンプー！」  
と言いなからスカンプーを出した。

『スカンプー スカンプーポケモン スカタンクの進化前 お尻から強烈に臭いにおいの液体を飛ばして身を守る。匂いは24時間消えない。タイプはどく・あく』

「お前もだ！」

「あなたもよ！」

と言うとダイキとマリコはそれぞれフワンテとピッピを出した。

『フワンテ ふうせんポケモン フワライドの進化前 人やポケモンの魂が固まって生まれたポケモン。じめじめした季節が大好き。タイプはゴースト・ひこう』

『ピッピ ようせいポケモン ピイの進化系 愛くるしいしぐさで

大人気。静かな山奥で仲間たちと暮らしていると考えられている。タイプはノーマル』

「三体もいっぺんに…どういつつもり？」

とマオが言うとエリは

「何って？決まってるじゃない…三体でいっぺんに攻撃するのよ！」

ロケット団と三対一で戦うことになったマオ。はたしてアキのコリンクは取り戻せるのか？

つづく…

第六話 ロケット団現る（中編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第七話 ロケット団現る（後編）

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かっていたマオとユキは途中ロケット団と遭遇しアキのコリンクが奪われてしまった。はたしてコリンクを取り戻せるのだろうか？

「何のつもりって…三体でいっぺんに攻撃するに決まってるでしょ！スカンプー！みだれひっかき！」

とエリが言つと続いてダイキが

「フワンテ！かぜおこしだ！」

と言つた。そのあとマリコが

「それじゃあ私も…ピッピ！おうふうビンタです！」  
と指示を出す。

「ヒコザル！かわして！」

という声を聞きヒコザルは技をかわすが次々と飛んでくる攻撃をかわしきれなかった。

「ヒコザル！」

とマオが言つとエリは

「威勢がいいけど…よわっちいわね…。」  
と言つた。

「まだまだよ！ヒコザル！ピッピにひっかく！」

とマオが言つとヒコザルはピッピに迫るが

「ピッピ…おうふうビンタです！」

という指示を聞いたピッピのおうふうビンタで跳ね飛ばされてしまふ。

「ヒコザル！頑張つて！」

とマオが言つとエリは

「うるさいトレーナーね！スカンプー！トレーナーにどくガス！」

と言った。

「えっ！」

とマオが言っているときスカンプーはマオの方へ攻撃を出した。

マオは息を止めて必死にガスを吸わないようにしているが

(やばい…これを吸ったら…でも…もうダメ…)

と思った瞬間。

「ムツクル！あのガスを吹き飛ばして！」

という声の後に森の中からムツクルが飛んできてガスを吹き飛ばした。

マオが力が抜けたのか気を失って倒れてしまうと

「マオちゃん！」

と言いながらユキが飛び出してきた。さらにそれに続くようにアキが出てきて

「あなた達！三体一の上にトレーナーを攻撃するなんて何を考えるのよ！」

と言った。するとエリは

「じゃまだだったからやっただけよ…まっ！威勢がいいだけで弱かったけど…」

と答えたが後ろの方でダイキとマリコが

「三対一までならまだしもトレーナーを攻撃するのはやりすぎだよな…」

「そうですね…さすがにそこまでは…」

というような会話をしていた。それを聞いたエリは

「私たち悪役でしょうが！それくらいやりなさいよ！」  
と二人に言った。

「…とは言ってもねー」

と二人が声をそろえて言うとエリは

「もういいわよ！コリンクはこっちにいるんだし…っていないじゃん！」

と言った。振り返ると檻が開いておりそこにいたはずのコリンクが

いなくなっていた。

「コリンクなら、さっきあなた達がゴチャゴチャ話している隙に取り返させてもらったわよ…。」

とアキの聲がした。アキの方を向くと確かにアキの横にコリンクがいた。

「ユキちゃん！反撃するわよ！コリンク！スパーク！」

「私も…ムツクル…つばさでうつ…ナエトルはたいあたり…。」

と二人がそれぞれ指示を出すとムツクルとコリンク、ナエトルはそれぞれロケット団のポケモンを攻撃し始めた。

三体が出した攻撃はそれぞれ命中した。

「コリンク！とどめのスパーク！」

コリンクがスパークを放つと小さな爆発が起こり

「…やな感じ…」

と言いながら三人は飛んで行きキラーンとお星さまになってしまった。

「よく飛ぶわね…。」

とアキが言つとユキは

「もしかしたら…あの人たちが変なところに飛んで私たちの恨みを持って襲ってきたりとか…」

と言つがアキは

「大丈夫じゃないの？つてマオちゃんは！」

と言いながらマオの方を向くがマオはまだ意識が回復してなかった。

「大変！急いで治療しないと！」

「…ちゃん…マオちゃん！」

という声でマオがゆっくりと目を開けると

「マオちゃん！よかった！心配したんだから！このまま目を覚まさないかと思った！」

と泣きながらユキが抱きついた。

「ユキは？」

とマオが聞くとアキが

「病院よ…マサゴタウンの…お医者様呼んでくるわね…。」  
と言い残し病室を出て行った。

「マサゴタウン…また戻ってきちゃったんだ…。」

とマオが言くとユキは

「戻ったもなにも…私たちずっとマサゴタウンのあたりをうろしてただけみたいよ…。」

と言った。するとマオは

「なんだ…そうだったの…。」

と言うと思いついたように

「そうだ！コリンクは？」

と言った。

「コリンクは無事だったよ…ちゃんと取り返したから…。」  
とユキは答えた。

「そう…よかった…。」

とつぶやくとマオは寝てしまった。

一方その頃アキの攻撃で飛ばされたロケット団は木に引っかかっていた。

「あいつら！絶対復讐するんだから！」

とエリが言くとダイキは

「また始まったよ…昔からエリは根に持つからな…。」  
とつぶやいた。

無事コリンクを取り戻したマオ、ユキそしてアキ。マオとユキの旅はまだまだつづく…

第七話 ロケット団現る（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第八話 マサゴタウンの病院で…

ユキがポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かっていたマオとユキは途中ロケット団に襲われ病院にいた。

「少しとはいえスカンプーのどくガスを吸ってますからね…念のため一週間はここで入院することをお勧めいたします…。」

と医者が言つとマオは

「旅は続けられますか？」

と聞いた。

「それはできると思っけど…とりあえずフタバタウンの君の母親に連絡したから…またあとでいいから君もジュンサーさんに事情を話してくれるかな？」

と医者が言つとマオは

「はい…。」

と答えた。

マオは病室に戻るとお見舞いに来たユキに

「ここで一週間入院だつてさ…。」

と言つとユキは

「そう…もしかしたら…一週間つてのは…」

と言つた。マオが

「ユキちゃん…縁起でもないこと言わないでよ…でも…コンテスト間に合わないね…。」

と言つとユキは

「ごめん…縁起でもないこと言つて…それに別にいいのよ！コンテストの事は…また別のところでも開催されるし…それにたぶん出たとしてもちゃんと出来ないよ…マオちゃんが大変なのに…。」

と答えた。するとマオは

「先に行つてて…。」  
と小さな声で言った。

「えっ？」

とユキが聞き返すとマオは

「先にコトブキシテイへ行つてつて言つてるの！マオちゃんコンテ  
ストに間に合わないじゃない！後で追いつくから…。」

と言った。

「マオちゃん…でも私は…さっきも言つたけど…」

とユキが言うのをマオはさえぎるように

「私のことなんか気にしなくていいから…行つて！」  
と言った。

「マオちゃん…。」

とユキがつぶやくと病室の入り口から

「確かにここに一週間いたらコンテストには間に合わないわ…。」  
という声がした。ユキが振り向くとそこにはアキが立っていた。

「でもね…マオちゃん…ユキちゃんや私はあなたの事が心配なのよ  
…特にユキちゃんは…幼なじみがこんなことになったら誰だつて心  
配するわよ…私もリンクを必死に取り返そうとしてくれた人をほ  
おつておいてのんきにコンテストなんか出てられないわ…。」

とアキが言うとユキは

「アキちゃんの言う通りよ！私たちはマオちゃんが何と言おうと退  
院するまでお見舞いに来るからね！」

と言つとマオは

「少し一人にさせて…。」

と言った。するとユキは

「わかった…。」

と答えてアキと共に病室を出た。

一人になるとマオは

「私つたら何を言つてるんだらう…。」

とつぶやいた。気が付くと目から流れてきた涙がシートに一滴、二滴と落ちていった。

ユキとアキは病室から出ると休憩室へ行った。

「マオちゃん…怒っちゃったのかな…もしかしたら…もう口きいてくれないかも…それならまだしも私の顔も見たくないかもしれない…。」

とユキが言うとアキは

「そんなことないわよ…マオちゃんたぶん私たちに気を使ってるんじゃないかな…グランドフェスティバルまでに開催されるコンテストの回数も限られてるし…。」  
と答えた。

「そうだといけど…。」

とユキが自信なさげに答えるとアキは

「あなた達幼なじみなんですよ！大丈夫だって！」  
と言った。

そんな様子を上空の気球から望遠鏡で見ているロケット団の三人組の姿があった。

「見つけた！ぜったい復讐してやるんだから！」

とエリが言うとマリコが

「ちよつと…復讐とかそういうのよりもやるべきことがあるんじゃないやありません？」

と聞いた。

「私のやることに口を挟まないで！私をコケにしてくれた礼は絶対するんだから！」

とエリが言うとダイキが

「こりゃ止められんな…。」  
とつぶやいた。

「ダイキ！なんかメカ作りなさい！」

とエリが言うとダイキは

「メカつて？」

と聞いた。

「復讐するためのでしょ！あんたに任せるから！」

とエリが言うとマリコが

「ただでさえ予算がないのでそんなことに使うのはどうかと…。」  
と静かに抗議するがエリは聞く耳を持たない。

「とにかく！さっさと作るのよ！いい？私のスキャンプーのどくガスを吸ったはずだから一週間ぐらいいはあいつらこの町にいるはずね…だから一週間以内に作って！」

とエリが言うとダイキはめんどくさそうに

「わかつたけどさ…一週間じゃなかなか予算の都合上厳しいんだけど…。」

と答えた。それに対し

「そこはあんたが何とかしなさい！」

とエリが言うとダイキは

「やっぱり…。」

とつぶやいた。

マサゴタウンで入院することになってしまったマオ…二人の旅はまだまだ続く…

第八話 マサゴタウンの病院で…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第九話 マサゴタウン それぞれの…

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅をしていたマオとユキはマサゴタウンでマオが入院したマサゴタウンにいた。

マオは病室の窓から見える景色を眺めながら横にいたヒコザルに「ねえ…ヒコザル…。」

と話しかけた。ヒコザルがマオの方を向くと

「旅って思ったよりも大変だよね…ごめんね…いきなりこんなことになっちゃって…。」

と言いながら頭をなでるとヒコザルはうれしそうに顔をしている。

「あなたはそういうこと気にしないのかしら…。」

とつぶやくとマオはヒコザルの頭をなでるのをやめて再び外を見た。

「早く旅の続きがしたいな…。」

とマオはつぶやいた。

ユキとアキが花屋でお見舞いのための花を見ているとアキが

「ねえ…ユキちゃん…あの人って…。」

と言いながら一人の少女を指差した。ユキがそっちの方を見ると頭に緑色のバンダナをした少女が花を選んでいた。

「あれってさ…ハルカじゃない？」

とアキが言うとユキは

「そうかもしれないけど…もしかしたら間違ってる…それで…。」  
と言うがアキは

「間違ってるなら謝りゃいいじゃん！」

と言ってその少女の方へ行った。

「あの…もしかして…ハルカさんですか？」

とアキが聞くとバンダナを付けた少女が

「そうだけど…。」

と答えた。するとアキは

「やったユキちゃん！本物よ！本物！本物のハウエンの舞姫ハルカさんよ！」

とやや興奮気味に言った。

「ほんとにほんとに本物！すごい！こんなところで会えるなんて！」  
とユキが言うとハルカは

「そんなに言われると照れるかも…。」  
と言った。

「あつあのサインいただけですか…私たちポケモンコーディネーターなんです！」

とアキが言うとユキは

「私はまだ旅立ったばかりでコンテストパス持ってないけど…。」  
と言った。するとハルカは

「そうなの！それじゃあ頑張っしてほしいかも！」  
と言うとどこからか色紙とペンを出してサインを書いた。

「はい！これ！」

と言いながら色紙を渡すとハルカは

「あなた達はもうすぐ開かれるコトブキ大会に出るの？」  
と聞いた。するとアキが

「それは…ちょっといろいろありまして…出るなら次の大会からかなって…。」

と言った。

「そう…私はこれからシンオウ地方のコンテストに出るつもりだからまたどこかで会えるかも！それじゃあまたどこかで！」

と言うとハルカは去って行った。

「すごいね！ハルカさんと話せちゃったよ！サインまでもらっちゃったし！」

とアキが言うとユキは

「本当ね…。」

と答えた。それから思い出したように

「そうだ！マオちゃんへのお見舞いの花！」

と言つとアキは

「あー忘れてた！」

と言つと二人はふたたび花を選び出した。

一方こちらはロケット団の三人組

ダイキはスパナを握ると

「本当にいいのか…作って…これでシンオウ地方でコリンクを大量捕獲するために降りた予算がなくなっちゃうけど…。」

とエリに言った。

「いいから作りなさい！サンバ博士からの頼みよりも復讐が優先よ！」

とエリが言つとエリの携帯の着信音が鳴りエリが

「はい…もしもし…。」

と電話に出ると電話の相手は

『ナンバである！』

と言つて電話を切った。

「そうそうナンバ…とにかく作りなさい！」

とエリが言つとマリコが

「でも…今回上手くいけばヤマダとコサブロウの地位を私たちのものにできるんですよ…。」

と言つた。するとダイキは

「確かにマリコの言うとおりで！リンバ博士は早急にコリンクを必要としているがヤマトとコサンジが別の任務で不在だから俺たちに頼んだんだ…下手に失敗するとこれつきりつてのもあるかも…。」

と言つた。その直後今度はダイキの携帯が鳴つたためダイキが

「はいもしもし…ダイキです。」

と出ると案の定電話の相手は

『ナンバである！』

と言って電話を切った。

「とにかく！つべこべ言わず作る！」

とエリが言っているとダイキはメカを作り出した。

「今に見てなさい…目に物見せてやるわ…。」

とその様子を見ながらエリはつぶやいた。その横でマリコは

「これでナンバ博士から信頼を得ようとかそういう話は消えたわね

…。」

とため息をしながらつぶやいていた。

つづく…

第九話 マサゴタウン それぞれの…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第十話 ホウエン地方のトレーナー

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅をしていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

今マオは少しだけ外出の許可が出たため母と共に病院近くのベンチに座っていたにいた。

「マオ…旅続ける気なの？」

と母が聞くと

「もちろんだよ！ママ！」

と答えた。

「今回の事でどれだけ心配したことか…あなたは余分なことにまですぐに首を突っ込むから…」

と母が言うとマオは

「今度から気を付けるよ…。」

と言った。

「とにかく！フタバタウンに帰るわよ！」

と母が言うとマオは

「いやよ！まだ始まったばかりじゃない！」

と言つが母は

「そんなこと言って！退院したら帰るわよ！これ以上危険なことがあつたら大変じゃない！」

と言った。するとそのやり取りを近くで聞いてた少年が

「いいじゃないですか…本人が行きたいって言ってるんですから…」

「

と言った。

「あなた勝手に人の話に入らないでください！」

と母が言うとその少年は

「会話に勝手に入ったのは謝りますが…娘さんの意思も少し尊重し

てあげたらどうかと…。」  
と言った。

「この子はまだ旅に出るのが早すぎたんです！だからこんなことに…。」

と母が言つと少女は

「だったら俺とポケモンバトルしませんか？俺が勝ったら俺達と旅をするということ…今この場にはいないんですけど幼なじみと二人でホウエン地方から来たのでシンオウ地方の人がいれば心強いです…やりますか？」

と言った。すると母は

「いいですよ…ところであなたは？」  
と言った。

「俺はカナズミシティ出身のソウヤと言います…三対三のシングルバトルでどうですか？」

とソウヤが聞くと母は

「ええ…もちろんいいわよ！」  
と答えた。

その頃花屋ではユキとアキがまだ花を選んでいた。

「これに決めた！」

とアキが言い会計を済ませるとユキは

「もうこんな時間…急がないと…。」

と言いながら小走りで花屋を出た。すると向こうから来た少女と肩がぶつかった。

「すみません！」

とユキが言つとその少女は

「いえいえ…ところで男の子みませんでした？私と同じ年ぐらいで黒い髪なんです…。」  
と言った。

「いえ…見てませんけど…。」

とユキが言うと少女は

「そうですか…。」

と言った。

「よかつたら私たちも探すの手伝いしましょうか？」

とアキが言うと少女は

「ほんとうですか？私はイリスと言います…。」

と言った。

「私はアキです！」

「私は…その…ユキと言います…。」

と二人がそれぞれ自己紹介するとイリスは

「アキさんにユキさんですね…よろしくお願いします…ところでお

二人はなにか用事があるように見えるのですが…。」

と言いながらユキが持っている花を見た。

「これは…ちよつと友達のお見舞いに…。」

とアキが答えるとイリスは

「それでは先にそつちを済ませましょう…もしかしたらそこへ行く

途中で会えるかもしれませんし…。」

と言った。

「それじゃあ…病院から行こうか！」

とアキが言うとユキは

「もしかしたら…その病院に行く途中に大きな罠があつてそれで目

的は…。」

と言つがアキは

「あーもう！物事を悪い方ばかり考えてると本当にそうなるわよ

！」

と言いながらぶつぶつ言っているユキの手を引いて歩きだした。

ふたたびマオ達…

三人が病院の敷地内にあるバトルフィールドに來ると母は

「マオ！審判やつて！」

と言った。

「はいはい…。」

と答えるとマオは二人の間に立ち

「これより！フタバタウン出身のマナ対カナズミシティ出身のソウヤのバトルを開始します！使用ポケモンは三体どちらかのポケモンがすべて戦闘不能になった時点で終了します！それではバトルはじめ！」

と言った。

そんな様子を見る三人組

「あの小娘結構元気になってきてるじゃない…そろそろメカもできてるでしょうから徹底的に足止めさせるのよ！」

とエリが言うとダイキは

「それで…なんだってあんなところに…」

と文句を言うとマリコは

「エリさんにしてはまともな作戦じゃない…」

と言ったがダイキは

「いや…目的が復讐って時点でまともじゃないからね…ってゆうかマリコいつのまに乗り気になってるのさ…きまでは任務が優先とか言ってたじゃん…」

と言った。するとマリコは

「そうでしたっけ…そういうことは録音しとけダメガネ！」

と言い放った。

「何で急にダメガネ呼ばわり！ってゆうか俺メガネかけてねーし！とダイキが言うがエリは

「とにかく！って徹底的にやるわよ！」

と言いマリコはその横で

「おー！」

と言っている。

「はーどうなることやら…」

と言つダイキのつぶやきは夕焼けの空にむなしく消えて行った。

じゅん…

**第十話 ホウエン地方のトレーナー（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

なおソウヤとイリスはリクエストで登場したキャラです。

これからもよろしく願います。

## 第十一話 バトル開始！マナVSソウヤ

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅に出ていたマオとユキはマオが入院したためマサゴタウンにいた。

「バトル開始！」

と夕日を背にマオが言う。母は

「まずはこの子よ！行って！ポッチャマ！」

と言いポッチャマを出した。

「キルリア！バトルスタート！」

と言いながらソウヤがキルリアを出した。

『キルリア かんじょうポケモン ラルトスの進化系 サイコパワーでできた空間の裂け目から未来の出来事を見る力がある。晴れた朝は気分良く踊るといわれる。タイプはエスパー。』

「ポッチャマ！先手必勝ってことでバブルこうせん！」

ポッチャマがバブルこうせんを出す。

「キルリアかわしてれいとうパンチ！」

とソウヤが指示を出す。キルリアはバブルこうせんをかわすとれいとうパンチを繰り出しポッチャマに迫る。

「ポッチャマ！うずしお！」

れいとうパンチを出しながら迫っていたキルリアはそれに飲み込まれてしまう。

「ポッチャマ！つつく！」

「キルリア！レポートで脱出してエナジーボール！」

と言う指示を聞きキルリアはレポートでうずしおから脱出した後エナジーボールを放つ。

「ポッチャマ！つつくで破壊して！」

エナジーボールはポッチャマに迫るがポッチャマのつつくで破壊される。

(この戦術…どこかで…)

とソウヤが考え始めるが

「ポツチャマ！バブルこうせん！」

ふたたびぶるこうせんが飛んできたため一旦考えることをやめ

「キルリア！かわせ！」

と指示を出す。

(思い出せ…どこで見たんだ…確か…)

「ポツチャマ！連続でバブルこうせん！」

「キルリア！全部かわしてエナジーボール！」

ポツチャマは次々バブルこうせんをだしキルリアはそれをかわし続ける

(うずしおで閉じ込めて動きを止めておいてつつくで攻撃する…さらにその後のエナジーボールをつつくでことごとく破壊している…かなり厄介だな…でもエナジーボールは草タイプの技で水タイプのポツチャマにあたれば効果は抜群…この攻撃の突破口は…どこかで見てるはずなんだ…まてよ…確かマナさんはフタバタウンの出身…)

と考えていたソウヤの頭にあるコーディネーターの名前が浮かんだ。

「キルリア！レポートで後ろに回ってエナジーボール！」

キルリアはポツチャマの背後に回るとエナジーボールを出した。突然後ろから攻撃されたポツチャマはエナジーボールが直撃してしま

った。

「ポツチャマ！立って！」

とマナの声を聞き少し立ち上がるがポツチャマは倒れてしまった。

「ポツチャマ！戦闘不能！キルリアの勝ち！」

とマオが言うとマナはポツチャマに駆け寄り

「ポツチャマ…よく頑張ったわね…ゆっくり休んで…」

と言ってモンスターボールに戻した。

「なかなかやるわね…次はこの子よ！行って！ブイゼル！」

『ブイゼル　うみイタチポケモン　フローゼルの進化前　首にあ

る浮き袋に空気をためると浮き輪のように膨らみ水面に顔を出した  
浮かぶ タイプはみず。』

（ブイゼルか…バシャーモだとタイプからして不利だな…。）  
「キルリアこのままいけるか？」

とソウヤが聞くとキルリアはソウヤの方を向きうなずいた。

「一気に決めるぞ！キルリア、エナジーボール！」

「ブイゼル…れいとうパンチではじいて！」

キルリアはエナジーボールを放つがブイゼルがことごとくれいとう  
パンチではじく

（このブイゼルもかなり鍛えられている…でも、ブイゼルは水タイ  
プ…エナジーボールが当たれば効果は抜群…だったら！）

「キルリア！サイコキネシスからエナジーボール！」

キルリアはサイコキネシスでブイゼルを持ち上げてからエナジーボ  
ールを放つが

「空中だからって何もできないなんて大間違いよ！ブイゼル！その  
ままアクアジェット！」

ブイゼルのアクアジェットは落下する速度も加算されエナジーボ  
ールとぶつかった。フィールドで爆発が起こりあたりが煙に包まれる。  
煙が晴れるとキルリアとブイゼルが立っていたがキルリアは先ほ  
どのポツチャマから受けたダメージからか倒れてしまった。

「キルリア！戦闘不能！よって勝者ブイゼル！」

とマオが言くとソウヤはキルリアをモンスターボールに戻し

「お疲れ様…。」

と言った。

「さてと…これではお互いに二体ずつ…。」

とマオが言くとソウヤは

「次はこいつです！行け！バシャーモ！」

と言いバシャーモを出した。

つづく…

**第十一話 バトル開始！マナVSソウヤ（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくいお願いします。

## 第十二話 一進一退！マナVSソウヤ

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに参加するため旅をしていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

「次はこいつです！行け！バシャーモ！」

と言いつつソウヤはバシャーモを出した。

『バシャーモ もうかポケモン ワカシャモの進化系 パンチやキツクなどの格闘わざを身に付ける。数年ごとに古くなった羽が燃えて新しくしなやかな羽に生え変わる。タイプはほのお・かくとう』  
「バシャーモ…確かハウエン地方の初心者用ポケモンの最終進化系だったかしら…」

とマナが言つとソウヤは

「ええ！そうです！」

と答えた。

「バシャーモはほのおタイプ！一気に決めるわよ！ブイゼル、アクアジェット！」

ブイゼルはバシャーモに向けアクアジェットで迫る。

「バシャーモ…よけてかみなりパンチだ！」

ブイゼルはアクアジェットでバシャーモの迫るがぎりぎりバシャーモにかわされかみなりパンチを受けてしまった。

「かみなりパンチ…なかなかやるじゃない…接近戦が無理ならブイゼル！みずのはどう！」

ブイゼルはみずのはどうを放ちそれはバシャーモに迫る。

「バシャーモ！よける！」

「ブイゼル！アクアジェット！」

バシャーモは上にはねてよけるがブイゼルのアクアジェットに直撃してしまった。

「バシャーモ！」

バシャーモはソウヤの呼びかけにこたえるかのように立ち上がる。

「バシャーモ…まだいけるか？」

とソウヤが聞くとバシャーモはうなずいた。

「それじゃあ…バシャーモ…かみなりパンチ！」

「ブイゼル！れいとうパンチ！」

バシャーモとブイゼルはそれぞれ攻撃を出しながら衝突しお互いの技がぶつかり爆発した。

煙が晴れると二体とも立っていたがお互いを見た後倒れてしまった。

「ブイゼル、バシャーモともに戦闘不能！よってこの勝負引き分け！」

とマオが言うと二人はブイゼルとバシャーモをそれぞれモンスターボールの戻し

「よく頑張ったな…ゆつくり休んでくれ…。」

「ゆつくり休んでて頂戴…。」  
とそれぞれ言った。

「なかなかやるわね…でも、この子は早々負けないわよ！」

と言いながらマナがモンスターボールを構えるとソウヤは

「俺だつて負けませんよ！」

と言いモンスターボールを持った。すると二人は

「最後はこの子よ！行ってフカマル！」

「最後はこいつです！行けフカマル！」

と言いながらお互いにフカマルを出した。

そんな様子を見る三人組

「ねえ…エリ、ダイキ…あのソウヤとかいう人…どこかで見たことあるような気がするんだけど…。」

とマリコが言うとダイキは

「言われてみれば…どっかで見たことあるような気がするな…。」  
と言った。するとエリは

「確か…ハウエンリーグに出てたわね…。」  
と言った。

「そうそう…思い出しました…確かハウエンリーグでベスト8でしたわね…。」

とマリコが言うとエリは

「だったら復讐ついでにあいつのポケモンもいただきましょう!」  
と言った。するとマリコは

「復讐までならまだしもそれは欲張りすぎじゃ…。」  
と言いだいきは

「だから復讐まではって何?復讐よりやることあるんじゃないの?」

と言つがエリは

「考えてもみなよ…たとえばさっきのキルリアを捕まえてサカキ様に献上すれば…。」

と言いだいきが

「どうなるんだよ?」

と言つとエリは

「サカキ様はいつも忙しくあっちこっちを移動されているでしょ…。」

「

と言つとマリコは

「ええ…まあ…。」

と相槌を打つ

「でも…『しまった!忙しすぎて間に合わない!』っていうようなときに私たちが献上したキルリアがやってきて…レポートでサカキ様を時間通りに目的地へ…『ふう…間に合ってよかった…これもあいつらが送ってきてくれたポケモンのおかげだ…何か褒美をやらねば…』となれば…。」

とエリが言うとマリコは

「なるほど…」

と言いだいきとマリコが

「幹部昇進！スピード出世で絶好調！」

と二人で言うがダイキは

「そんなにうまくいくのか？」

と言った。するとエリは

「そこを何とかするのがあなたの仕事でしょうが！」

と言った。するとダイキは

「やっぱり…ってゆうかあつちに仕掛けた罠にそろそろかかっている

ことじゃないの？あいつの仲間…。」

と言った。するとエリは

「そうね…ちよつと見に行きましょうか…。」

と言いわなを仕掛けた場所へ歩き出した。

つづく…

**第十二話 一進一退！マナVSソウヤ（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

### 第十三話 決着！マナVSソウヤ

コトブキシテイで開催されるポケモンコンテストに出場するためコトブキシテイへ向かっていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

「フカマル同士ね…。」

とマナが言うとソウヤは

「そのようですね…。」

と言った。

『フカマル りくザメポケモン ガバイトの進化前 大口を使った攻撃は威力が十分だがまだうまく戦えず自分も傷つく。 タイプは

ドラゴン・じめん』

「フカマル！りゅうのいかりよ！」

とマナが言うとソウヤは

「こっちもりゅうのいかりだ！」

と指示を出した。二つのりゅうのいかりはフィールドの真ん中でぶつかる。

「威力はほとんど同じか…。」

とソウヤが言うとマナは

「そのようですね…私、これでもシンオウリーグベスト8なんです…。」

と言った。するとソウヤは

「やはりそうでしたか…かつてコーディネーターでありながらジム戦もこなしグランドフェスティバルで優勝し、さらにシンオウリーグベスト8という成績を残して引退した伝説のコーディネーター…その独特の戦術の組み立てからついた名前はシンオウの奇術師マナ…その当時としては斬新なバトルスタイルは多くのコーディネーターが現在も参考にしている…それがあなたですよね…。」

と言った。

「あら…ハウエン地方のトレーナーなのによく知ってるわね…私が引退したきつかけはマオの事があつたらで5年も前なのに…。」  
とマナが言つとソウヤは

「俺がまだ子供だったころ俺が住んでいる街で開かれたポケモンコンテストを幼なじみに連れられて見に行つたとき偶然見たんですよ…それで興味を持つてあなたの事を少し調べていたんです…それで少しそうでないかと疑っていたのですが…ついさっきマナさんが言つたシンオウリーグベスト8つてという言葉で確信しました…あなたがあのコーディネーターだつて…。」  
言つた。

「あら…その幼なじみに感謝しときなさい…でもいくら情報を知つていても私に勝てるとは限らないわよ…フカマル！あなをほる！」  
とマナが言つとソウヤは

「こつちもあなをほるだ！」  
と言い地面の中で双方の技がぶつかる。

「こつなつたら…フカマル…りゅうせいぐん！」  
とマナが言つとソウヤは

「まずい！フカマルよける！」  
と指示を出すマナのフカマルが出したりりゅうせいぐんはソウヤのフカマルに直撃した。

「フカマル！」  
とソウヤが言つとフカマルは立ち上がりソウヤの方を見た。

「フカマルにドラゴンタイプの技は効果抜群…かなりのダメージを受けたんじゃない？」  
とマナが言つとソウヤは

「まだまだ…フカマル！あなをほる！」  
と言つた。

「いくらやつても無駄よ…フカマル…相手の居場所を見つけて…」  
とマナが言つとソウヤは

「フカマル！地面から出てドラゴンクロー！」

と言った。とつぜんマナのフカマルの背後から出たソウヤのフカマルはドラゴンクローを命中させ突然後ろから攻撃を受けたマナのフカマルは吹っ飛ばされた。

「フカマル！」

とマナが言つとマオが

「フカマル！ 戦闘不能！ よって勝者カナズミシティ出身のソウヤ！」と言った。マナはフカマルに駆け寄ると

「頑張ったわね…。」

と言つてからソウヤの方を向き

「なかなかですね… 実力はもとよりあなたのポケモンはあなたをかなり信用していますね… これだったらマオと旅させても大丈夫だと思います… よろしくお願いします…。」

と言った。するとマオは

「すごいね！ ママに勝つなんて！ これからよろしくね！ ソウヤ！ とここで一緒に来たつていう幼なじみはどこにいるの？」

と言った。するとソウヤは

「そういえば… 確か… 用があるからつて言うから俺が先にシンオウこうちに来て… 後から来るつて言つてたから… そういえば今日は何日だ？」と言った。マオが今日の日付を告げるとソウヤは

「そつだ！ 今日だった！」

と言った。

「えっ！」

とマオが言つとソウヤは

「少し探してくる！」

と言つてその場を後にした。

ちょうどそのころ病院の入り口に続く道を歩いていたユキ、アキ、イリスは落とし穴に落ちていた。

「もーなんなのよ…。」

とアキが言つと見覚えのある三人組が出てきて

「もーなんなのよ…と言われても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやるっ!」

「光よ!」

「水よ!」

「ポケモンよ!」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ!」

「マリコ!」

「ダイキ!」

「今回も主役は私たち!」

「我ら天下無双の」

「『『ロケット団!』』」

と名乗るとエリが

「あなた達はしばらくそこにいなさい…。」

と言い三人はその場を後にした。

つづく…

**第十三話 決着！マナVSソウヤ（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第十四話 落とし穴の中で…

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅に出ていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

ユキとアキそしてイリスはロケット団の掘った落とし穴に落ちていた。

「何なんですか…あの人たち…。」

とイリスが言うとアキは

「人のポケモン奪ったりする悪い人たちよ！」

と答えた。

「でも…どうやってたらここから出られるかな…もしかしたら…一生ここから出れなくて…それで…」

とユキが言うのをさえぎるようにアキは

「ここはマサゴタウンのはずれとはいえ病院へ続く唯一の道なのよ！いつか助けが来るって！」

と言って励ました。するとイリスが

「それは結構先になるんじゃないかしら？」

と言った。

「どういうこと？」

とアキが聞くとイリスは

「もう夜になるのよ…この先にあるのは病院だけって言ってましたよね…だったらこんな時間に人は通らないと思いますけど…」  
と意見を述べた。

「そういえば…」

とアキが言うとユキは

「そうよね…。」

と言った。

「…誰か助けてー！！！！」

と言う三人の声は夜の闇に消えて行った。

マナとのバトルを終えたソウヤは焦ってマサゴタウンのポケモンセンターへ戻ろうとしたがマナが

「もう時間は遅いですし今日はこっちにいたらどうです？山の上にあるこの病院から暗い夜道を通ってふもとのマサゴタウンに戻るの  
は危険ですし…謝ればその幼なじみも許してくれるんじゃないかしら？」

と言ったため病院にとどまっている。

「そういえば…ユキちゃん遅いね…。」

とマオが時計を見ながら言うソウヤが

「ここまで来るのが危ないからってふもとにいるんじゃないのか？  
と言った。するとマオが

「それならいいけど…ユキちゃんの性格と言うか…なんというか…。」

と言った。そしてそのあとにつづくように

「そうだよね…やっぱり5年前からずっとそうよね…。」

とマオが言った。

(5年前？そういえばマナさんが引退したのも5年前…マオの事が  
とか言ってたけど…5年前に何があったんだ…。)

とソウヤが考えているとマオが

「ちょっとそこまで様子見てくる！」

と言って病院の外に出た。

「マオ！あなた入院してる身なんだからおとなしくしてなさい！」

と言いながらマナが外へ出るとソウヤもそれに続いた。

ふたたび落し穴の中…

「救助が来ない以上私たちで脱出するしかないと思います…。」  
とイリスが言うとアキは

「具体的にどうやって？」

と聞いた。

「そうですね…つるのむちとか使えるポケモン持っていないませんか？」  
とイリスが聞くとアキが

「だったら私フシギダネなら持ってますけど…。」

と答えた。するとイリスは

「それでしたらフシギダネを出していただけますか？」

と言った。するとアキは

「いいけど…」

と言いながらフシギダネを出した。

『フシギダネ たねポケモン フシギソウの進化前 生まれてからしばらくの間は背中の種から栄養をもらって大きく育つ。 タイプはくさ・どく』

「フシギダネを使ってどうするの？」

とアキが言つとイリスは

「あそこの木につるのむちをひっかけてそれを伝って脱出するんです！」

と言った。

「あーなるほど！それならいけそう！」

とアキが言つとユキは

「もしかしたら…途中でフシギダネが…」

と言つがアキは

「フシギダネ！つるのむち！」

と指示を出した。フシギダネのつるのむちは木にしつかりと結びついている。

「まずはイリスから行って！」

とアキが言つとイリスは

「はい…わかりました…」

と言つてからつるのむちを少し引っ張り登り始めた。イリスが上まで登り

「大丈夫ですよ！」

と言いながら手を振るとアキは

「次はユキちゃんよ行って！」

と言った。するとユキは

「いや…でも…アキちゃんは…。」

と言った。するとアキは

「私なら大丈夫だから…必ずあとから行くよ…こんな穴からぐらい出れるよ！」

と言った。

「私なら大丈夫…必ずあとから…行く…。」

とつぶやくとユキは頭を抱え込んでしまった。

「ちよつと！どうしたの？ユキちゃん！」

尋常でない様子のユキを見てアキはユキの肩を揺さぶりながら言った。

「大丈夫ですか？」

と上からイリスの声が聞こえる。肩を揺さぶられているユキの頭にある男の子との会話が響いていた。

『なにをやってるんだよ！早くマオと逃げろ！』

『でも…お兄ちゃんは？』

『俺は大丈夫だから…必ずあとから行く！』

『絶対だよ！』

『もちろんだ！お前こそちゃんとマオというよ！』

『うん！』

「ねえ！ユキちゃんってば！」

アキが話しかけるがユキは

「もういや…あの時みたい…これ以上失いたくない…。」  
とつぶやきまた黙ってしまったあと意識を失ってしまった。  
「ユキちゃん！」

つづく…

第十四話 落とし穴の中で…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第十五話 ロケット団の逆襲

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅をしていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

マオが走っていると

「待てよ！マオ！」

と言いながらソウヤがマオの腕をつかんだ。

「ユキちゃんを探さないと！早くしないと！」

と言うマオをソウヤの後ろから追いかけてきたマナが

「マオ！病院に戻らないと！ユキちゃんなら大丈夫だから！」

と言った。するとマオは

「あのときだつてそうじゃない…タツヤ兄ちゃんなら大丈夫だからつてそう言ったのに！」

と大声で言つて泣き出してしまった。

「今度は絶対に大丈夫よ！」

とマナが言うがマオは

「そんな保証がどこにあるのよ！5年前ママはそう言つてホウエン地方に行つちやっただじゃない！なんか変な感じがするのよ…あの時…ママがホウエン地方に旅立つ前の日に感じた…あの時の感じと…また何か大切なものがなくなる気がして…。」

と言いながらマオは泣き続けている。

その時巨大なメカがふもと側からやってきた。

「何！あれ？」

とマナが言つと

「何！あれ？と言われても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやろう！」

と言う声と共にメカの頭の部分から三人組が姿を現して

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリコ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私達！」

「我ら天下無双の」

「「「ロケット団！！！！」」」

と名乗った。

「ロケット団？何でカントーで暗躍している組織が…。」

とソウヤが言うとエリは

「ちよつとした復讐よ…その娘にね！」

と言いながらマオを指差した。

「何？逆恨み？」

とマオが言うとマリコは

「ええ…そんなところですよ。」

と言った。すると横にいたダイキが

「認めるのかよ！」

と言った。

「なんかよくわかんねーけど…こんなメカ…フカマル…りゅうのいかりだ！」

と言いながらフカマルを出しそのフカマルが出したりゅうのいかりはメカを直撃した。

「もう一発りゅうのいかり！」

とソウヤが指示を出すとエリが

「あら…いいのかしら…そんなことをして…」  
と言つとソウヤは

「待った！フカマル！」

と言つたがもう攻撃はメカにあたつた。

「どういふことだよ…」

とソウヤが言つとエリは

「このメカとユキとかいうやつとアキとあと…一人…イリスとかい  
つたかしら…がいる落とし穴とこのメカにはある細工がしてあるの  
…。」

と言つた。

「細工つてなんだよ！俺聞いてねーぞ！」

「そうですよ！私も聞いてません！」

とダイキとマリコが言つとエリは

「細工つて言つても仕組みは単純…このメカが受けたダメージはそ  
のまま落とし穴の中の人間に与えられる…それがどういふことかわ  
かる？」

と言つた。するとマオは

「つていふことはさっきのりゅうのいかりのダメージは！」

と言つとエリは

「そっくりそのまま落とし穴の中の人間に伝わっているのよ…どう  
？驚いた？」

と言つた。

「そんな手を使うなんて！許せない！」

とマナが言つとエリは

「許せなくて結構！それでこそ悪役よ！」

と言つた瞬間メカが崩れ始めた。

「ちよつと！どうなってるのよ！」

とエリが言つとダイキは

「予算が少なくて強度が弱いつえに変な細工するからだよ…。」  
と言つた。するとエリは

「それじゃあ…まさか…。」  
と言った。するとダイキは  
「まあ…そのまさかだな…。」  
と言った瞬間にメカが爆発し  
「…やな感じー!」  
と言いながら三人は飛ばされて星になった。

ちょうどそのころアキは何かユキを起こして穴の外の脱出させた後に穴を出ようとした。その時なにか大きな衝撃を感じ狭い穴の中で吹き飛ばされた。

「キヤ!」

とアキが言っているとイリスは

「大丈夫ですか?アキさん?」

と話しかけた。アキが

「大丈夫よ…何とか…。」

と言って体を動かそうとするが足をけがしたらしく動けない。

「アキちゃん!」

とユキが言っているとアキは

「ユキちゃん!イリス!誰か助けを呼んできて!ここからならすぐ

に病院に着くはずだから…。」

と言った。

「でも…アキちゃん!」

とユキが言っているとアキは

「大丈夫よ!絶対に!」

と言った。するとユキは

「今度は大丈夫…今度は大丈夫…。」

と自分に言い聞かせるように言ったあとイリスと共に病院の方へ駆けて行った。

「ユキちゃん…頑張つて…。」

とアキがつぶやくとまた大きな衝撃が襲いパラパラと壁が崩れ始め

る。

「これはちょっとやばいかもね…。」  
とつぶやくと自分の持っているモンスターボールを穴の外に向かって投げポケモンたちを外に出した。

そのあとの大きな音とともにアキの意識は闇の中に沈んでいった。

つづく…

## 第十五話 ロケット団の逆襲（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から新章に入ります。

これからもよろしくお願いします。

## 第十六話 アキの思い

マサゴタウンでの出来事からもうすでに二か月がたった。アキは生き埋めになる直前に近くを通りかかったポケモントレーナーのポケモンが出したサイコネシスで間一髪脱出できたがそれまでに受けたけががひどく旅をつづけるどころか歩くのも困難と診断された。あのロケット団三人組は指名手配されたがいまだ捕まらず、もともと孤児で身寄りのなかったアキはマオの家に住むことになった。

シンオウ地方 フタバタウン マオの家

マオがいつも通り慣れた手つきで朝食を作っているとアキが車いすに乗って出てきて

「おはよう…マオちゃん…。」  
と言った。

「アキちゃん！おはよう！」

とマオは元気よくあいさつを返すがあの日以来アキはまったく笑顔を見せない。

（まるであの時のユキちゃんを見てみたい…でもユキちゃんの方が重傷だったかな？）

と思っていると台所に焦げ臭いにおいが漂ってきた。

「マオちゃん…。」

とアキに言われ現実に戻ったマオは

「いけない！焦がしちゃった！」

と言いながら焦げた卵を皿に盛り付ける。

そのあとマナがあくびをしながら起きてきて

「また焦がしてるじゃない…まったく…トーストはうまく焼くのに…。」

と言いながら真っ黒になった明らかに体に悪そうな卵を食べる。朝

食を食べているとアキが

「あの…マオちゃん…。」

と話しかけた。

「どうしたの？アキちゃん…。」

とマオが言うとアキは

「マオちゃんってさ…もう旅に出る気はないの？」

と聞いた。それに対しマオは

「うーん…確かに旅には出たいけど…アキちゃんの事ほったらかしにして旅に出るわけにはいかないからずっとここにいるつもりよ…。」

「

と答えた。

あの後ソウヤとイリスは1週間ほどフタバタウンにいたがアキとマオに言われアキやマオそしてあの日以来部屋に引きこもってしまったユキの事を気遣いつつポケモンジムがあるクロガネシティへ向かって旅立った。

マオが黙っているとマナが

「そういえばさっき聞いたんだけどヒナコちゃんが帰って来るそうよ…今日の昼にはつくらしいからアキちゃんと行って来たら？もちらん…ユキちゃんも誘って…。」

と言った。

「どうする？アキちゃん…。」

とマオが言うとアキは

「私も行く…。」

と言った。

「ヒナコと会うの久しぶりだな！」

と言いながらマオは朝食を食べ終えアキの車いすを押しユキの家に向かった。

二人がユキの家に行くとユキの母親が出てきて

「あら…マオちゃんにアキちゃんじゃない…どうかしたの？」

と聞いた。

「ママからヒナコが帰って来るって聞いたからユキちゃんと一緒に  
行こうかな？って思ってた。」

とマオが答えるとユキの母は

「そうね…ちよつと声かけてみるわ…。」

と言い家の中に入って行った。

数分後ユキの母はマオ達のところに戻ってきて

「ダメだったわ…部屋から出る気ないみたい…。」

と言った。

「そうですね…私たちは広場にいるので気が向いたら来るように言  
っておいてください…。」

と言つと二人は広場に向かった。

広場に向かう二人をユキは二階の窓から見ていた。

（私のせいだ…私になかなか行かなかったから…だからアキちゃん  
が…出て行っても口きいてくれるわけないよ…マオちゃんだって5  
年前の事件の後しばらく口きいてくれなかったもん…たぶんまたあ  
の時みたいにな…。）

とユキが思っていることを知ってか知らずか母がドアの向こうから  
「マオちゃんが気が向いたら広場に来て！だって…行ってあげたら

？さびしがつてたわよ…。」

と言った。

「いいの！さつきも言ったでしょ！私は行かない！  
とユキが言つと母は

「そう…。」

と答えて階段を下りて行った。

そんな様子をニヤース型気球から見ている三人組

「やつと来れたわね…シンオウ…。」

とエリが言つとマリコが

「ところで何でまたシンオウに来たんですか？ 私たち指名手配されてますしそもそもマサゴタウンの一件でくびになるところだったんですよ…。」

と言いつそれに続くようにダイキが

「そうだよ…なんとか給与カットと2か月の特別指導で済んだんだおとなしくしておいた方がいいんじゃないのか？」

と言つた。するとエリは

「うるさいわね！一度ならず二度もやってくれたのよ！パパにもぶたれたことないのに！三度目の正直って言葉があるでしょうが！」  
と言つた。

「使い方間違つて…はいないか…でも任務を優先した方が…。」  
とダイキが言つとマリコは

「どちらにしろシンオウでやっても任務には変わりありませんわ…ただ予算が前よりかなり少ないので…あまり下手には動けませんね…。」

と意見を述べる。しかし、エリは

「任務はポケモンの大量捕獲。トレーナーのポケモンでも関係ないでしょ…。」

と言つてからダイキの方を向き

「ダイキ！なにかメカを作つて！今度はちょっとやさつとじゃ壊れないやつ！」

とエリが言つとダイキは

「勝手な改造しないならね…。」

と言つた。するとエリは

「それは約束する！」  
と言つた。

「わかつたよ…。」

と言つとダイキはメカを作る場所を探しだした。

第十六話 アキの思い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第十七話 帰ってきたヒナコ

フタバタウンに住み少女マオはひさしぶりにフタバタウンに帰ってきたヒナコに会うためアキと共に広場に向かっていた。

「ねえ…マオちゃんはヒナコさんと知り合いなの？確かグランドフエステイバルで上位を取ったと思うけど…。」  
とアキが聞くとマオは立ち止まり

「うん…まあね…昔はよく遊んだな…ユキやヒナコと一緒におままごとやったりユウト君たち男の子の鬼ごっこを一緒にやってみたり…それに…なによりもあのころはタツヤ兄ちゃんがいた…。」  
と答えた。するとアキは

「そうなんだ…。」  
と言いながらマオの顔を見るとなんだか過去を懐かしむというより悲しげな顔をしていた。

「マオちゃん…？」

とアキが言つとマオは我に返り

「何でもないわ！早く広場に行きましょう！」

と言いふたたび車いすを押して歩き出した。

（マオちゃん…今すぐく悲しそうな顔をした…タツヤって人が何か関係あるのかな？）

とアキが考えているといつの間にか寝てしまった。

「ねえ…アキちゃん…。」

と話しかけながらマオがアキを見ると規則正しく寝息を立てている。  
（寝ちゃってるのか…だったら起こすのはかわいそうかな…。）

と思いマオはそのまま広場に向かって歩いて行った。

広場に着くと寝ていたアキを起こしヒナコが到着するのを待った  
10分ほど待っていると

「マオちゃん！ひさしぶり！」

と言いながらヒナコがやってきた。

「久しぶり！キナコ！」

とマオが言っているとヒナコは

「キナコじゃなくてヒナコよ！ヒナコ！まったく！マオちゃんまで！」

と言った。

「ごめん！ごめん！前ヒカリが帰ってきたとき町の外に出かけてて会えなかったからさ……。」

とマオが言っているとヒナコは

「そういえばこの子は？」

と言いながらアキを見た。

「この子は……。」

とマオが言っていると大きな音とともにポツチャマ型のメカがやってきた。

「うっそ！このポツチャマ大きくてかわいい！」

とマオが言っていると

「うっそ！このポツチャマ大きくてかわいい！と言われても答えないのが常識だが……まあ今回ぐらいは答えてやるう！」

と言っているとあの三人組が姿を現し

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリコ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私たち！」

「我ら天下無双の」

「『『ロケット団!』』」

と名乗った。

「しつこいわね! またあなた達なの!」

とマオが言つとヒナコが

「ロケット団つてシンオウにもいたんだ…。」

と言つた。

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!」

とマオが言つとヒナコは

「そうよね! ポツチャマ! バブルこうせん!」

と肩に乗っていたポツチャマに指示を出した。

「ちよつとやそつとの攻撃じゃあこのメカは…。」

とエリが言つとダイキは

「いや…これはまずいな…マオやユキのポケモンの攻撃ぐらいなら

まだしも相手は凄腕のコーディネーターだから…。」

と言いだしマリコが

「なにか反撃は?」

と聞くとダイキは

「ないこともない…巨大バブルこうせん発射! ポチツとな!」

と言いながらボタンを押すとメカポツチャマの口から巨大なバブル

こうせんが発射された。

「やるじゃない! こつちのボタンは?」

と言いながらエリがボタンを押そうとするとダイキが

「ちよつと! そつちのボタンは!」

と制止しようとしたがエリはボタンを押してしまった。すると突然

画面に

「自爆装置作動」

と表示された。

「どついつことよ!」

とエリが言つとダイキが

「予算が余ったから自爆装置付けてみました！」  
と言った。

「そんなん付ける必要ないでしょ！」  
とエリが言うと

「3…2…1…0！」

とカウントされ

「それじゃあ…やっぱり。」

と言った瞬間メカが爆発した。

「まったく！変な機能付けないでよ！」

と飛ばされながらエリが言うとマリコが

「あなたも人のこと言えないんじゃない…。」

と言いだいきが

「それじゃあそろそろ…」

と言つと三人は

「…「やな感じー！！」「」

と言いきらんとお星さまになってしまった。

飛んで行ったロケット団を見てヒナコは

「ロケット団つてうわさには聞いてたけどよく飛ぶのね…。」

とつぶやいた。

「そうだ…結局その子はだれなの？」

とヒナコが聞くとマオはアキについて簡単に説明した。

ヒナコは話を聞くと

「そうなんだ…ロケット団許せないわね！アキちゃん！大丈夫！き  
つとあんな奴ら…。」

と言ったがマオが

「ヒカリと一緒にヒナコが大丈夫！つて言うときは一番危ないよね  
…。」

と言った。するとヒナコは

「そうかな…そうだ！さっきの話だとマオちゃんはもう旅には出ないの？」

と聞いた。マオが

「そうだけど…。」

と答えるとヒナコは

「それならちょっと提案があるんだけど…。」  
と言った。

「提案？」

とマオが聞き返すとヒナコは

「あのね…。」

と話し始めた。

つづく…

第十七話 帰ってきたヒナコ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第十八話 再出発 マオの決意

フタバタウンに住む少女マオは今日ふたたび旅立とうとしていた。

マオは旅支度をしながら

「それにしても…ヒナコに言われなかったら考え付かなかったな…。」

とつぶやき昨日の事を思い出していた。

「マオちゃん！旅に出てユキちゃんやアキちゃんを元気にできるんじゃないの？」

とヒナコが言うとマオは

「でも…私が離れると…。」

と言った。するとヒナコは

「大丈夫！マオちゃんの夢をあきらめなくてもコンテストに出場してアキちゃんの夢もかなえればいいのよ！マオちゃんならできると！」

と言った。するとアキは

「ヒナコさんの言うとおりね…私もマオちゃんがここにいるより私の代わりに夢をかなえてくれるならさびしくなんかないよ！」

と言った。するとマオは

「わかった！また旅に出るわ！それでコンテストもジム戦も両方きっちりやる！」

と言った。

「そのいきよ！」

とヒナコが言うと横のポツチャマもそうしるうでも言っているようだった。

「これでよし！っつと…。」

と言うとマオはトーストを焼いて食べてから家を出た。マオはヒコザルをボールから出すと

「ヒコザル！新しい旅の始まりよ！」

と言った。するとヒコザルは飛び上がった喜んだ。

(アキちゃん…ユキちゃん…私頑張るからね！)

と決意を新たにしフタバタウンの入り口まで来ると

「遅かったですね…。」

と声をかけられた。すると

「ほんと…俺らを二か月も待たせるなんてな…。」

と別の声がしてソウヤとイリスが現れた。

「ソウヤ！イリス！」

とマオが言うとソウヤは

「マナさんと約束したからな…お前と旅するって…。」

と言いつつに続いてイリスが

「一人で旅するよりもより大勢の方が楽しいでしょ…だから、これから一緒に旅をするのでよろしくお願いします…マオさん…。」

と言った。

「もちろんよ！」

とマオが答えるとソウヤは

「それじゃあどうするんだ？まずはクロガネシティへ向かうか？」

と言った。するとマオは

「そうでしょうか！クロガネシティへはマサゴタウンとコトブキシテイを通って行くと確実なはずよ！」

と言った。するとイリスは

「そういうえば…ユキさんが見当たらないようですが…やっぱりまだ…。」

と言った。

「いまだにね…だから私はアキちゃんの夢やユキちゃんを元気にするためにポケモンコンテストにも挑戦する！」

とマオが言うとイリスは

「ポケモンコンテストとジム戦ですか…少し難しいのでは？」  
と聞いた。するとソウヤが

「無理ではないだろうな…実際にマオの母親であるマナさんはコンテストとジム戦、両方こなしてるからな…。」  
と答えた。

「それじゃあそろそろ行こうか！」

とマオが言うとイリスは

「そうですね…出発しましょうか…終わりのない遥かなる旅へ！」  
と言った。マオが

「ええ！」

と答えると三人はマサゴタウンへ向け旅立った。

そんな様子を上空から見つめる三人組

「どうやらフタバタウンを離れるようね…。」

とエリが言うとダイキは

「まだやるのか？」

と聞いた。

「もちろんよ！」

とエリが答えるとマリコが

「エリさん…深追いは厳禁ですしこれ以上はさすがに上も黙っていませんよ…。」

と抗議した。

「とにかく！あいつらのポケモンをサカキ様に献上するまではこっちに集中するわよ！」

とエリが答えるとダイキは

「まったく…どうなっても知らねーよ…。」

と言ってから

「とは言っても上の連中はイッシュ制圧作戦で忙しいからそれなりに動きやすいかな…。」  
とつぶやいた。

その頃フタバタウンのマオの家

「行っちゃいましたね…でも本当によかったですか？」

とアキが聞くとマナは

「いいのよ…これで確かにコンテストとジム戦の両立は大変だけどそれだからこそ思いつく戦法があるし何よりせつかく旅に出るんですもの…たくさんいろんなことも経験しなきゃもったいないわ…。」と答えた。

「経験ですか…そうですね…ソノオタウンの孤児院から旅立って時には急いで…時には寄り道して…あっちこっち旅したけど孤児院にいたら経験できないことがいっぱいありました…。」

とアキが言うとマナは

「それにしても…少しさびしくなるわね…。」

と言ってから少し間を置き

「どうせならあなたにママって呼んでもらおうかしら…どちらにせよあなたとずっと暮らすんだし…いつそのこと養子にでもならない？」

と聞いた。するとアキは

「いいんですか？」

と聞いた。

「ええ…あなた悪い子じゃないしどんな形にせよ家族が増えるのは喜ばしいことだから…。」

とマナが言うとアキは

「それじゃあこれからよろしく…ママ…。」

と少し頬を赤らめながら言った。

(まあ…かわいいわね…なんだかこんな表情始めてみる気がするわ…よっぽどうれしかったのね…。)

と思いつつマナは

「それじゃあ昼ごはんでも作るから待っててね！」

と言って台所へ向かった。

ソウヤ、イリスと共にふたたびフタバタウンから旅立ったマオ。  
これから彼女はどんな旅路を歩むであろうか？

つづく…

第十八話 再出発 マオの決意（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第十九話 語られる5年前の事件

クロガネジムに挑戦するため旅をしているマオは途中イリスに意  
見でシンジ湖に来ていた。

「ここがシンジ湖ですか…やはりシンオウ三大湖に数えられるだけ  
あるますね…。」

とイリスが言うともオオが

「そうね…5年前まではこのへんにも人が住んでいたんだけどね…。」

と言った。

「そういえば…気になってたんだけど…マオの話だとユキの現在の  
人格が形成されたのもマオさんがマオのことを理由に引退したのも  
5年前…5年前に何かあったのか？」

とソウヤが聞くとマオは

「5年前…私が住んでいた町はフタバタウンより西にあったの…も  
つとわかりやすく言うとシンジ湖の西岸から西に行く旧道があるん  
だけどその先に私たちが住んでいたコハントウっていう名前の町  
があったの…とは言ってもコハントウの住人はみんなフタバタウ  
ン出身だって名乗るんだけど…5年前まで私たちはそこに暮らして  
いた…。」

と言った。イリスが

「それじゃあどうしてフタバタウンへ引っ越したのですか？」

と聞いた。するとマオは

「単純よ…もうないのよ…。」

と言った。ソウヤが

「もうないって…。」

と言うともオオは

「ええ…5年前コハントウは謎の集団に襲われたの…その時町一

番の実力者だったママはハウエン地方でポケモンコンテストのカナズミ大会に出場していた時だったわ…。」

「5年前のカナズミ大会…確かイリスと見に行ったときの実質マナさんの引退試合となった大会か…この大会への参加を最後に突然引退したんだよな…。」

「思っているとマオは

「せっかくだから行ってみようか…コハントウンがあった場所…。」  
と言いながら西の方へ歩き出した。

シンジ湖から西に延びる明らかに長い期間人が通っていない道を進むと少し開けた場所に出た。

「ここに…私たちの町があったの…。」

とマオ言うのと近くの切り株に座り

「あれは…5年前…」

と語りだした。

5年前…

「ユキちゃん！タツヤ兄ちゃん！お母さんが出てるコンテスト始まるよ！」

とマオがテレビの前で言うのとユキは実の兄であるタツヤとともに現れ

「まったく…マオったら…テレビは逃げないから急がなくていいじゃない…。」

と言った。その時外で爆発音が聞こえた。

「何が起きたの？」

とマオが言うのとタツヤは

「お前たちはここにいろ！俺が様子を見る！」  
と言って外の出た。

数分後タツヤは戻ってきて

「大変だ！変な集団が町を襲ってる！俺はいいから早く逃げろ！」

と言つとマオは

「わかった！フタバタウンまで行って助けを呼んでくる！」

と言つて外の出るため靴を履いた。ユキがタツヤのそばで立っているとタツヤは

「なにをやつてるんだよ！早くマオと逃げろ！」

と言つた。

「でも…お兄ちゃんは？」

とユキが聞くとタツヤは

「俺は大丈夫だから…必ずあとから行く！」

と答えた。

「絶対だよ！」

とユキが聞くとタツヤは

「もちろんだ！お前もちゃんとマオというよ！」

と言つた。するとユキは

「うん！」

と答えてマオと共に家を出た。

「それが…タツヤ兄ちゃんとの最後の会話だった…そしてその日を最後にコハンタウンは地図から消滅したの…。」

とマオが言つとイリスは

「そんなことが…。」

と言つた。

「でも…いったい誰がそんなこと？」

とソウヤが言つとマオは

「わからない…5年たった今でも…。」

と答えた。それから少し間を開けてから

「でも！私、がんばるって決めたんだ！ねっヒコザル！」

と言つと網が飛んできてヒコザルをとらえそのあとから来たマジックハンドに残りのポケモンが入ったモンスターボールがとられてし

まった。

「いつたいなんなの？」

とマオが言くとニヤース型の気球に乗ったいつもの三人組が現れ

「いつたいなんなの？と聞かれても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやろう！」

「光よ」

「水よ」

「ポケモンよ」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリコ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私たち！」

「我ら天下無双の」

「『ロケット団！』『』」

と名乗った。

「またあなた達ですか…いい加減にしてほしいわね…。」

とイリスが言くとエリは

「いい加減も何も悪役はしつこいのよ！」

と言った。

「それじゃあさっさと帰る？」

とダイキが聞くとエリは

「そうね…さっさと行きましようか…と言いたいところだけど…」

と言いながらマオの方を向き

「徹底的に仕返しするわよ！」

と言った。ダイキはため息をつきながら

「まったく…そろそろ手柄上げないと幹部昇進どころか降格食らう

んじゃないか？」

と意見を述べた。

「確かにそうですね…これ以上の失敗はまずくないですか？」

とマリコが言うとエリは

「とにかく！やるわよ！」

と答えた。するとダイキは

「エリには悪いけど…今回は本気で帰るから…ポチツとな！」

と言いながらボタンを押すと気球は上空へあがり東の方へ飛行し始めた。

「ちよつと待ちなさい！」

とマオが大声で言うとダイキは

「待ってって言われて待つ悪役はいませんよ！」

と返した。

「とにかく追いかけましょう…。」

とイリスが言うと二人は

「もちろんだ！」

「当然よ！」

と答え三人は気球が飛んで行った方向へ走り出した。

つづく…

**第十九話 語られる5年前の事件（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第二十話 マコト登場！

クロガネシティでジム戦に挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオはロケット団にポケモンを奪われてしまった。

「こーらー待ちなさい！」

とマオが言うとエリは

「まだ追ってくるわよ！」

と言うとダイキは

「だったら…これで…」

と言いながらボタンをだし

「ポチツトな！」

と言ってボタンを押した。だが何も起こらない。

「おかしいな？」

と言いながらダイキがボタンを押すがやはり何も起こらない。

「残念だな…そのボタンで動く装置は僕がすべて破壊した…ついでにしたのポケモンをとらえている網もね…それにしてもマオ…こんな奴らにポケモン奪われるなんて…まだまだだな…」

と言う声がした。声がした方を向くとそこには黒い髪を短めに切りメガネをかけた人物が立っていた。

「マコト！どうしてここに？」

とマオが言うとマコトは

「久しぶりにシンオウに帰ってきたから少しあの場所に寄って行くと思うってね…そしたらポケモンをこんな奴らに奪われているマオを見つけたってわけだよ…とにかくさっさとけりをつけようじゃないか！リザードン…かえんほうしゃ！」

『リザードン かえんポケモン リザードの進化形 苦しい戦いを経験したリザードンほど炎の温度が高くなると言われている。タイプはほのお・ひこう』

リザードンが放ったかえんほうしゃは気球に命中し爆発した。

「今度はうまくいくと思ったのですが…。」  
とマリコが言うとダイキは  
「結局さっさと逃げてても結果は変わらないんだな…。」  
とつぶやきエリが  
「それではみなさん！」  
と言うと三人は  
「『『やな感じー！！！』』』」  
と言いながら飛んでいきキラーンとお星さまになった。

「へー見事に飛ぶものだね…。」  
とマコトがつぶやくとこつちを向いて  
「君たちは？」  
と聞いた。マオが

「こつちの男の子はソウヤ。それであつちの女の子がイリス。」  
と二人の事を紹介するとマオはソウヤとイリスの方を向き  
「この子は私の幼なじみのマコト…あの日、あの時間、コハンタウンに居て生き残った5人のうちの一人よ…でも、私と同じで出身地はフタバタウンになるわけだけど…。」  
とマコトの事を紹介した。

「ところで君たち三人ともポケモントレーナーみたいだけど…僕とバトルしない？」

とマコトが聞くと三人は  
「別にいいわよ…。」  
「俺もちょうどバトルがしたかったところだ。」  
「久しぶりにやろうか！」

と答えた。するとマコトは  
「それじゃあ…せっかくだからマオ！やろうか？使用ポケモンは一体…どう？」

と聞いた。マオが  
「ええ！もちろんよ！」

と答えるとマコトは

「それじゃあソウヤとイリスさんはまた後日…マサゴタウンでもやりましようか…。」

と言うとマオが

「あなた私以外の女性をさん付けで呼ぶのは相変わらずなのね…。」  
と「以外」の部分強調していった。そのあとにソウヤが

「わかった…それじゃあ俺が審判をやるう…。」  
と言い二人の間に立って

「これよりフタバタウン出身のマオ対同じくフタバタウン出身のマコトによるポケモンバトルを始めます…使用ポケモンは一体…どちらかのポケモンが戦闘不能となった時点で勝敗が確定します…それではバトルはじめ！」

とマコトが言うともオオは

「頼んだわよ！ヒコザル！」

と言いながらヒコザルを出すそれに対し相手は

「行け！リザードン！」

と言い先ほどのリザードンを出した。

「ヒコザル！ひのこ！」

ヒコザルがひのこを出すがりザードンはびくともしない。

( やっぱりマコトは強いわね。。。 )

とマオが思っているとマコトは

「まだまだだな…今度はこっちから仕掛けさせてもらうよ！リザードン…かえんほうしゃ！」

と指示をだしそれを聞いたリザードンのかえんほうしゃはヒコザルを直撃し、ヒコザルは遠くへ飛ばされ倒されてしまった。

「ヒコザル！戦闘不能！よって勝者マコト！」

とソウヤが言うともオオは

「ご苦労様…ゆっくり休んで…。」

と言いながらヒコザルを抱き起した。

「やっぱりマコトは強いね…。」

とマオが言つとマコトは

「いや…まだまだだな…僕はもつと強くなる…だからマオも強くなれ！それじゃあ後はソウヤとイリスさんか…マサゴタウンのポケモンセンターのバトルフィールドでやりませんか？リザードンも休ませたいのでね…。」

と言つた。するとイリスは

「私は構いません…。」  
と答えた。

「それじゃあ…マサゴタウンへ向けて…出発！」

とマオが言つと四人はマサゴタウンの方向へ歩き出した。

つづく…

第二十話 マロト登場！（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第二十一話 マコトの実力！（前編）

クロガネジムに挑戦するためクロガネシティへ向けてソウヤ、イリスと共に旅をしているマオはマサゴタウンにいた。

マコトの案内で道に迷うことなくマサゴタウンに着いた四人はポケモンセンターの横にあるバトルフィールドにいた。

「そういえば…施設の改修があつてバトルフィールドがいろいろ選べるみたいだけど…イリスさんは希望がありますか？」

とマコトが聞くとイリスは

「私はなんでもいいです…。」

と答えた。するとマコトは

「そうか…だったら…水のフィールドにしようか！」

と言ってフィールドの脇にあつたボタンを押した。するとフィールドが開き中からとところどころ浮島がある水槽が出てきた。

「それじゃあバトルを始めようか…。」

とマコトが言くとイリスがうなずいた。それを見たマオは

「私が審判を務めるわ…。」

と言って審判用に開いている場所に立った。

「これよりフタバタウン出身のマコト対カナスミシティ出身のイリスのバトルを開始します！使用ポケモンは一体！どちらかのポケモンが先頭不能となった時点で終了します！バトル開始！」

とマオが言くとイリスは

「私はこの子で行きます…行ってくださいアブソル！」

と言ってアブソルを出した。

『アブソル わざわいポケモン 進化はなし 空や大地の変化を敏感に感じ災害を察知する能力を持つ。100年生きる長寿のポケモン。タイプはあく』

「ホウエン地方のポケモンですか…だったらミロカロス！行ってく

れ！」

と言いながらマコトはミロカロスを出した。

『ミロカロス　いつくしみポケモン　ヒンバスの進化形　大きな湖の底にいとされていいる。最も美しいポケモンと言われている。絵画や彫刻のモデルとなっている。　タイプはみず』

「アブソル…10まんポルトです！」

アブソルが10まんポルトを出してそれがミロカロスに迫るがマコトは

「まだまだだな…ミロカロス…ミラーコート！」

と指示を出す。ミラーコートによってはじかれた10まんポルトがアブソルに命中する。

(特殊がダメなら物理で…)

「アブソル…一気に決まます！ギガインパクト！」

アブソルがギガインパクトで迫りミロカロスに命中した。

「ミロカロス！」

とマコトが言った。

「立ってくれ！ミロカロス！」

とマコトが言うとミロカロスはゆっくりと体勢を立て直す。

「ミロカロス…あまごいからハイドロポンプ！」

ミロカロスはあまごいで雨を降らせてからハイドロポンプを繰り出した。

「アブソル…よけてください！」

とイリスが指示をするが先ほどのギガインパクトの反動で動けないアブソルをあまごいで威力が上がっているハイドロポンプが直撃しアブソルは倒れてしまった。

「アブソル戦闘不能！よって勝者マコト！」

とマオが告げるとイリスはアブソルに駆け寄り

「アブソル…よくやりました…。」

と言ってアブソルをモンスターボールに戻した。

「なかなかやるわね…。」

とイリスが言うとマコトは

「まだまだだな…さつきも言ったが僕はもっと強くなって見せる…絶対に…」

と言った。それからソウヤの方を向き

「それじゃあソウヤ…今度は君とバトルだ…フィールドの希望はある？」

と聞いた。

「それじゃあ…」

ソウヤが希望を伝えるとマコトは

「へえ…なかなか面白いこと言うね…」

と言いフィールドの脇のボタンを押した。

そんな様子を見ているいつもの三人組…

「なかなか強いじゃない…あのマコトとかいうやつはポケモン…」

とエリが言うとダイキは

「確かに…強いな…」

と言った。するとエリは

「だったらあいつのポケモンをゲットしてサカキ様に献上するわよ！」

と言いながら立ち上がった。

「それはちょっと難しいんじゃないかと…」

とマリコが言うとエリは

「いい？バトルが終わってあいつのポケモンがつかれているときに…」

とエリが言うがダイキは

「見たところ余裕勝ちしてるけど…あのマコトってやつ…」

と言った。すると横からマリコは

「そうよね…強いし上にやや紳士的な態度、何よりあの容姿はまさに私のタイプね…」

と言った。

「マリコ…そういう話をしてるわけじゃ…。」  
とダイキが言うとエリは

「確かにいい男ね…この前はすぐに飛ばされたからあんまり見てなかったけど…。」

と言いつし間を開けてから

「でも！作戦は作戦！あいつのポケモンゲットするわよ！」  
と言った。

「それで…そうやるんだよ？」

とダイキが言うとエリは

「そんなのあんたが考えるに決まってるじゃない！」

と言いだいきは

「まったく…やっぱりこうなるのか…。」

とつぶやいた。

「それにどうするにも予算がないからそこをどうにかしないと…」

とダイキが言うとエリは

「だったら…提案があるんだけど…。」

と言った。

「珍しいな…エリが提案なんて…それでどんな内容だ？」

とダイキが聞くとエリは提案の内容を話した。

「確かに言えてるね…。」

とエリの提案を聞いたダイキは言った。

「わかつたら行動開始よ！」

とエリが言うとダイキは

「それじゃあ行きますか…。」

とつぶやき三人はある場所に向かって歩き出した。

つづく…

**第二十一話 マコトの実力！（前編）（後書き）**

読んでいただきありがとうございます

これからもよろしくお願いします。

## 第二十二話 マコトの実力！（後編）

クログネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオはマサゴタウンにいた。

バトルフィールドが開いてきて中から丈の長い草が生えたフィールドが出てきた。

「さて…ソウヤ…丈の長い草のフィールドをチョイスしたよ…さっそく始めようか…。」

とマコトが言うとソウヤは

「そっだな！それじゃあさっそく！」

と言うとマコトはマオの方を向いて

「このフィールドでの特別ルールはその書いてある通りだ！ちゃんと審判しろよ…マオ！」

と言った。

「わかったわよ…。」

と言うとマオはルールが書かれているボードを見て

「確かに面白そうね…。」

とつぶやいてから

「これよりフタバタウン出身のマコト対カナズミシティ出身のソウヤのバトルを開始します！使用ポケモンは二体！どちらかのポケモンがすべて戦闘不能となった時点で終了します！なおトレーナーのよるポケモンへの指示並びにポケモンの交代は一切認められませんので注意してください…バトル開始！」

とマオが言うとマコトは

「まずは…カクレオン…行ってくれ！」

と言いながらカクレオンを出した。

『カクレオン いろへんげポケモン 進化はなし 体の色を周りの景色に合わせて変化させる能力を持つポケモン。驚くと元の色の戻

つてしまう。タイプはノーマルだが特性であるへんしよくの効果で受けた技のタイプに変化する。』

（カクレオンか…これまた厄介なポケモンだな…だけど…。）

「行け！バシャーモ！」

と言いつウヤはバシャーモを繰り出す。

かくしてトレーナーの指示なしのルールで二体のバトルが始まった。

（それにしても思ったより草の丈が長いな…バシャーモとカクレオンの位置を確認できるのは時々草むらの長さを超えて見える技だけか…。）

と思いながら上から見ていて状況がよくわかつているであろうマオとイリスを見た。なぜイリスも上にいるかというのは早い話不正防止である。このフィールドではトレーナーからポケモンの様子がまったく言っていないほど見えないため審判を最低でも二人配置しなければならぬのだ。

（これほどまで見えないのはもどかしいな…。）

とソウヤが思っているとマオとイリスが白い旗を振ってそのあとにマオが

「カクレオン！戦闘不能！よって勝者バシャーモ！」

と告げた。するとソウヤはカクレオンを

「カクレオン…ご苦労様…なかなかやるね…だけど…こいつはどうか…行ってくれ！エンペルト！」

と言いつながらボールに戻しエンペルトを繰り出した。

『エンペルト こうていポケモン プライドを気づつけるものは流氷もを切断するつばさで真つ二つにする。タイプはみず・はがね』

さて…相手がポケモンを出したらふたたび時々見える技などを見るだけである。

（頑張ってくれ…バシャーモ…お前ならやれると信じてる…。）

どれだけの時間がたっただろうか？いや、長く感じているだけかもしれない。その後バシャーモがやられて今はキルリアを出している。

(この人やけに強い…一切指示を出していないにもかかわらず時々見えるバブルこうせんなどの場所からしてかなりの腕前だ…このルールだからこそ長く続いているが普通に戦ったらイリスのように速攻でやられてるな…いったい何者なんだ？それにマナさんと言いたい人と言いたい…マオやユキもおそらくともない隠れた実力がある気がする…それになんでコハンタウン自分が住んでいる町ではなくフタバタウン近くの町を出身地と名乗ったりしているんだ…いったいなんだ？コハンタウンって言うのは…。)

とソウヤが考えているとマオとイリスが赤い旗を振ってから

「キルリア！戦闘不能！よって勝者フタバタウンのマコト！」

とマオが告げた。

「結構強いんですね…。」

とキルリアをボールに戻したソウヤが言うとマコトは

「君もなかなかだと思うよ…さすがハウエンリーグでベスト8に進出しただけある…。」

と言った。ソウヤが

「知ってたのか？俺の事…。」

と言つとマコトは

「忘れたの？まっハウエンリーグで自分が対戦した相手なんていちいち覚えてないものなのかな…。」

と言った。(ハウエンリーグでの試合？確か相手は…。)

とソウヤが思考をめぐらすとすぐにある人物が思い当たった。

「思い出した！確かハウエンリーグで優勝してたよな！」

と言った。するとマコトは半ばあきれ気味で

「やっと思い出したわけね…私はあなたに勝ってベスト4に進出したんだけど…今の今まで忘れてたんだね…。」

と言った。

「それはともかく…いいバトルだったよ…。」

と言いながらマコトが手を差し出すとソウヤはその手を取って握手

をした。それからマコトはイリスの方へ行き

「イリスさんも…いいバトルだったよ…。」

と言いながらイリスと握手を交わした。

「マコトはどんどん強くなっっていくね…私もがんばらないと!」

とマコトが言うとマコトは

「そういえば残りの三人はどうしたんだ？ユキさんとかヒナコさんとか…。」

と聞いた。マオが

「ユキちゃんはこの前ちょっとしたことがあっけり引きこもっちゃって…。」

と言うとマコトは

「またか…相変わらずと言うかなんというか…二人は?」

と聞くとマオは残りの二人の今の様子を知っている限り話した。先日会ったヒナコはともかくユウトとは1年以上会っていないので正確な情報ではないが…。

「なるほど…みんなそれぞれ夢を追いかけているのか…。」

と言うとマコトはリュックを持って

「俺は一旦フタバタウンへ行くよ…ユキさんやヒナコさんにも会いたいし…それじゃあな!ユウトにあつたら僕は元気だって伝えておいて!元気だな!」

と言ってマコトはフタバタウンへ旅立った。

つづく…

**第二十二話 マコトの実力！（後編）（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第二十三話 ロケット団 三人の出会い！

次なる作戦に使う資金を集めるためロケット団のエリ、マリコ、ダイキの三人はマサゴタウンのある商店でアルバイトをしていた。

「それにしても…エリがこんなこと言いだすなんて意外だな…。」  
とダイキが言うとマリコは

「まあ…ムサシさん達もやってたようですよ…それにしてもよくできましたね…アルバイト…。」

と言うとダイキは

「まあ指名手配と言ってもそんな熱心に手配書見る人なんて少ないからな…結構探せばアルバイトできるよ…とにかく資金を集めないとね！」

とダイキが言うと親方が

「こら！何さぼっとるんだ！しっかり仕事をせんか！」  
と言った。

「はい！」

と答えると二人もエリと共に仕事を始める。

「それにしても…こうしていると昔のことを思い出すな…。」

と大きな荷物を抱えながらダイキが言うとマリコは横で小さめの荷物を持ちながら

「そうですね…。」

と答えた。ダイキは荷物を所定の位置に置くところにかけてあった日めくりのカレンダーを見て

「もう5年になるのか…俺たちがロケット団に入団してから…。」  
とつぶやいた。

「本当ね…5年前、エリに出会った時もこんな風に二人で荷物運んでたっけ…。」

とマリコが言うとダイキは

「そうだったな…。」  
と答えるとそれから少し間をおいてダイキは  
「今でもはつきり覚えてる…今から5年前…地図上からあの町が消えた…ちょうどあの日だったな…。」  
と言つと目を細めて遠くの空を見つめていた。

5年前…

「やべーぞ！コハントウンのマナさんへの荷物まだ届けてねーじゃん！」

とダイキが言つとマリコは

「とにかく急がないとまた親方に大目玉くらうわよ！」

と言つとダイキと共にコハントウンの方へ走り出した。

「ねえ！コハントウンまでどのくらいかな？」

とマリコが聞くとダイキは

「多分このまつすぐ走れば15分ぐらいで着くと思う！」

と答えながら走っている二人の女の子にぶつかった。

「ごめん…大丈夫かい？」

とダイキが聞くと女の子のうち栗色の髪をした子が

「助けてください！」

と半泣きで訴えた。

「どこか怪我でもしたの？」

とマリコが聞くともう一人の黒髪女の子が

「町が…私たちの住んでる町が誰かに襲われて…それで…」

と泣きながら言った。ダイキが

「って言われてもな…。」

と言つとマリコは

「この子たちが嘘を言っているようには見えませんよ…とりあえず様子を見に行ってみませんか？」  
と言った。

「そうだな…。」

と答えると一人はフタバタウンまで助けを呼びに行くと言って去ったため栗色の髪の毛をした少女についてその少女が住んでいる町へ行くことになった。

「そこで見たものは今でも忘れられないな…。」  
とダイキが言うとエリは

「そうね…そういえば…あの子たちの名前なんでしたっけ？」  
と言うとダイキは少し考えてから

「ヒイラギマオと…サムゾラユキ…。」

とつぶやいた。するとマリコは

「あっそういえば…。」

と言いながらシンオウで何度か自分たちのメカをことごとく破壊している少女に思い当たった。

「どこかで見えたことあると思ったら…そういうことだったのか…。」  
とダイキが言うとマリコは

「そういえば…あの直後でしたよね…エリが現れたのは…。」  
と言った。

ふたたび5年前…

「どうなってるんだよ…。」

と言いながらダイキはコハンタウンの入り口に立ち尽くしていた。かつて小さいながらも人の生活が息づき活気あふれていた町はそこにはなかった。

「誰がこんなこと…。」

とマリコが言うと向こうから女性と子供が一人がやってきて

「それはさっぱりよ…。」  
と言った。

「この町の住人ですか？」

とマリコが聞くとその女性は

「いや…私は単にこのマコトとかいう子に頼まれてきたんだ…私が

来たときはすでにこの状態だったがな…。」

と答えて立ち上がったから

「私はエリ…あんたたちは？」

と聞いた。二人が

「私はマリコです…。」

「俺はダイキだ！」

と答えるとエリは

「ここで会ったのも何かの縁かもな…またどこかで会おうか！」  
と言つとエリは去つて行つた。

「それからシンオウにいるのが嫌になってカントーに出てきて当てもなく半ばやけくそでロケット団に入団して…ロケット団訓練所でエリと再会したんだっけ…。」

とダイキが言つとマリコは

「そうでしたね…すっかり忘れてました…今日は5年前のあの日、私たち三人が初めて出会つた日でしたね…。」

と言ひダイキは

「そうだな…。」

と答えてからエリと共にふたたび荷物を運び始めた。

その頃マオ達一行は…

「それで…ここはどこなんだ？」

とソウヤが聞くとマオは

「おかしいな…コトブキシティはこっちだと思つたんだけど…。」  
と答えた。皆さんお察しの通り現在マオ達一行はマサゴタウンを出た直後に迷子に…「迷子じゃなくて寄り道！」この状態は一般的には迷子と言つのだが…ともかくまったくどこに居るのかわからなくなつてしまった。

「ちゃんとコトブキシティに着くんですか？」

とイリスが聞くとマオは

「大丈夫よ！絶対つくから！」

と言うとマオはふと手元の腕時計に目を落とす。そこに表示されている日付を見てマオは

「そういえば…ちょうど5年前の今日だったな…あの日…。」  
とつぶやいた。

つづく…

第二十三話 ロケット団 三人の出会い！（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第二十四話 動き出す組織

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしているマオはやっぱり森の中をさまよっていた。

「ところでマオさんはマコトさんの事どう思ってるのですか？」  
とイリスが聞くとマオは

「そうだな… かつこよくて優しくて… ちょっと変なところあるけど…。」

と言うとイリスは

「そうですね… ところで変なところってどこですか？」  
と聞いた。するとマオは

「えっだって女の子なのに紳士ぶっちゃって変じゃない！」

と言った。するとソウヤとイリスそして上空の気球で丸いアンテナを使って会話を盗み聞きしていたロケット団の三人組が

「……マコトって女の子だったの！」「……」  
と大声で言った。

「そうだけど… 誰も気づかなかったの？」

とマオが首をかしげて言うソウヤが

「だってあの口調と言い格好と言いボーイッシュにもほどがあるだろ！」

と言った。するとマオは少し困った様子で

「私に言わないでよ…。」  
と言った。それからソウヤは少し間をおいてから

「それはいいとして… いつになったらコトブキシティに着くんだ？」  
と聞くとマオは

「おつかしいな… もうすぐのはずなんだけど… 多分もうすぐ… のはず… 迷子になんかならないから！ 絶対もうすぐだから！」  
と必死に訴えた。するとイリスが立ち止まり

「あれって…コトブキシテイじゃありません？」  
と言った。

「コトブキシテイかどうかわからないけど早く行こうぜ！」  
と言うとソウヤが走り出しイリスがそれに続いた。

「ちよつと！待ってよ！」

と言いながらマオも追いかける。

そんな三人を画面越しに見つめる一人の男がいた。画面には右半分  
の三人が写っている方にはマオの顔に何やらマークがされており  
左側にはヒイラギマオという文字とマオの写真が表示されており画  
面の中央に「一致」と赤い枠で表示されている。

「ようやく見つけたぞ…ヒイラギマオ…。」

と言うとその人物は別のファイルを開く「要警戒人物」というその  
ファイルにはヒイラギマナ、ヒイラギマオ、サムゾラユキ、ナナヤ  
マヒナコ、ナカシママコトの五人の名前と顔写真が載っていた。す  
るとその男の傍らにある電話が鳴りだした。

「私だ…。」

と言って電話に出て話の内容を聞いた男は

「私も今電話しようとしていたところだ…とりあえずヒイラギマオ  
には手を出すな…もう少し様子を見た方がいい…監視を怠るな…そ  
れとヒイラギマオというソウヤとイリスとか言う二人を要注意人物  
としてマークしておけ…。」

と言うと電話を切った。

「…もうすぐだ…もうすぐ計画は実行される…。」

と言うとドアをノックしてから秘書らしき人物がやってきた。

「失礼いたします…。」

と秘書が言うと男は

「ヒイラギマオの事ならさっき確認したぞ…。」

と言った。すると秘書は

「いえ…それが…タチカワユウトが逃げ出しました…。」

と報告した。

「なんだと！いったいどうやって！」

と言つと秘書は

「警備の隙をつかれたようでして…。」

と言つた。

「今すぐ連れ戻せ！絶対に探し出すんだ！」

と男が言つと秘書は

「はい！」

と答えて部屋を出た。秘書が去ると男はいらだつた様子で

「こんな時期に！いらぬことを！」

と大声で言っていた。

その頃どこかの地方のどこかにあるうっそうとした森で一人の男の子が草をかき分けながら森の中を走っていた。

（今すぐマオ達に伝えないと！すぐに逃げるようにって！）

と思いながら必死に走ってゆくすると後ろから黒い服を着た集団が追いかけてきた。

「まずい！もう追つてきやがった！」

と言つと男の子は無我夢中で走る。だが黒い服の男たちにすぐに囲まれてしまう。すると男たちの後から追つてきた女性が

「結構なことしてくれるじゃない…ユウト君…。」

と言つた。ユウトと呼ばれた男の子が

「今ごろユウト君だなんて呼ばれてもいい気はしないよ…。」

と答える。すると女性は

「そう？でもいつまでいきがっていられるかしら…あなたの背後は川…そして周りには屈強の男たち…さあて私たちの足元にも及ばないようなポケモンしか持ってないあなたはどうしたらいいか…選択肢は二つしかないわ…一つは…素直に降伏するか…もう一つはここで最後まで抵抗して死ぬか…どうする？」

と聞いた。するとユウトは

「選択肢が一つ足りないよ…。」

と言うと背後にある流れが急な川の方へかけて行き崖から飛び降りた。

「どうしますか？」

と一人の男が聞くと女性は

「ほおっておきなさい…どうせ助からないわ…ボスにはタチカワユウトは死亡したと伝えておくわ…。」

と言ってその場を後にした。

男たちや女性が去ってからはしばらくするとつるのむちが近くの木に絡みつきそれにつかまってユウトが上がってきた。

（まったく…崖の下を確認せずに行くなんて…結構いい加減だ…でもこれで俺が死んだことになって幾分か動きやすいか…。）  
と思っから

「って言ってもあんなこと言っただいいけど結局怖くなって木の根につかまった俺も俺だよ…。」

とつぶやくと月明かりがうつすらとした光を頼りに川に沿って下流の方へ歩き出した。

つづく…

**第二十四話 動き出す組織（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第二十五話 ポケモンなりきり大会！（前編）

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオは偶然たどりついた町で開催されているポケモンなりきり大会の会場にいた。

「俺はもつと早くジム戦が…。」

とソウヤが言うとイリスは

「いいじゃないですかソウヤ…せっかくこういう場面に遭遇したのですから…。」

と言いマオが

「そうそう！楽しまなきゃ！」

と言うと

「皆様ポケモンなりきり大会ではまだ飛び入り参加の方を募集しています。参加したい方は受付までお越しください…。」

と放送が流れる。マオが

「よし！せっかくだから参加しよう！」

と言うとイリスも

「だったら私も…。」

と言って席を立つ。

「ちょっと待てよ！二人とも！」

とソウヤが言うが二人はすでにそこにはいない。

「まったたく…。」

とつぶやくとソウヤも受付がある方へと向かった。

その頃会場の外ではテレビの映像でなりきり大会の飛び入り参加者歓迎との内容を見たエリが

「私も参加するわ！一回出てみたかったのよね…こういう大会…。」  
と言うとマリコが

「だったら私も！」

と言ってエリと共に会場の方へと走り出す。

「ちょっと！指名手配中だって忘れたの！」

と言うダイキの意見は完全に無視されたのだった。

また別の場所でもある女性が

「ポケモンなりきり大会か…参加してみようかな…。」

と言うと会場に向かった。

先ほどのアナウンスから30分ほどたつと司会者の女性が出てきて

「さて！ポケモンなりきり大会がいよいよ開催されます！司会はユウカさんが取材でトバリシティへ行っているのでわたくしリンが司会を務めさせていただきます…それではエントリーナンバー1番からどうぞ！」

と言うと舞台上に少年が上がってきてポケモンを出す。

その頃廊下ではマオとイリスがそれぞれ自分のポケモンを見つめていた。

「さて…どうしようか…。」

とマオが言うとイリスは

「困りましたね…。」

と言うとその後からソウヤが現れて

「なんだよ…何も考えずに参加したのか…。」

と半ばあきれ気味に言うするとマオは

「そつだ！いいこと思いついた！」

と言うとどこかへ行ってしまった。

「ちょっとマオさん！」

とイリスが言うとマオは何かを準備するために行ってしまった。

「困ったわ…どうしたらいいと思う？ソウヤ…。」

とイリスが聞くとソウヤは

「俺に聞かれてもな…。」  
と答える。すると後ろから

「だったら私がお手伝いしましょうか？」

と言いながら一人の女性が来た。

「あなたは？」

とソウヤが聞くとその女性は

「私はナオコって言うんだけど…案があるのに飛び入り参加の受付間に合わなくて…。」  
と言った。

「そうなんですか…私はイリスです…。」

とイリスが自己紹介するとそれに続きソウヤが

「俺はソウヤです…。」

と自己紹介する。

「イリスさんにソウヤ君ね…そういえば私少し人を探してるんだけど…この子見たことある？」

と言いながらナオコが出した写真には自分たちと同じ年ぐらいであろう男の子が写っていた。

「知りませんが…。」

とイリスが答えるとナオコは

「そう…すっかりこつちに来てるかと思ったけど…。」  
とつぶやくと紙を取り出しなにかを書いた後

「これ私の家の電話番号なんですけど…この子見かけたら電話してくれるかしら？写真も渡すから…でも探すときは二人だけでね…決してほかの人のこの写真見せたりしちゃだめよ…。」

と言った。イリスが

「何ですか？」

と聞くとナオコは

「探す人が多いと連絡がたくさん来たら大変だからよ…ほら、この子ってどこにでもいそうな顔立ちじゃない…。」  
と言って写真を指差した。

「確かに…。」

とソウヤが答えるとナオコは

「そーでしょー。」

と言っただけからイリスの方を向いて

「そうだった！なりきり大会の案だったわね！たとえば…アブソルとか持つてる？」

と聞いた。イリスが

「持ってますけど…。」

と言いながらアブソルを出すとナオコは

「さあて一見こういうような場面では不利に見えるアブソルをどうするか…選択肢は二つ…一つはオドシシなどと言ったシンオウでもポピュラーなポケモンのなりきり…そしてもう一つは…」

と言つと二人に自分の考えを説明した。それを聞くとイリスは

「なかなか面白そうですね…。」

と言った。ナオコが

「そーでしょー！早速やりましょう！」

と言つとイリスは

「でも…選択肢が一つ足りませんよ…私はアブソルではなくリオルで行きます…。」

と言つと

「ソウヤ…行くわよ…それではナオコさん…またどこかで…。」

と言い残しイリスはソウヤと共にその場を去った。二人が去っていくとナオコは

「選択肢が一つ足りないね…あの子と一緒にね…。」

と言いながら一人の男の子を思い浮かべていた。

（それにしても…あんなところに落ちたら助かるはずもないのに探してこいだなんて…あの人は慎重すぎるわよね…。）

と考えながらナオコはどこかへと歩いて行った。

その頃また別の場所ではエリとマリコそして結局参加することに

したダイキが作戦を立てていた。

「さて…どうしようかな…。」

とダイキが言うとエリは

「結局定員の関係で参加できたのはエリだけですから…エリのポケモンで言ったらどう?」

とマリコが言うとエリは

「いいこと考えた!ダイキ…ポケモン貸しなさいよ!」

と言うとダイキは

「いいけど…どうするんだ?」

と言いながらモンスターボールをエリに渡す。

「いいから!いいから!」

と言うとエリはどこかへ行ってしまった。

つづく…

**第二十五話 ポケモンなりきり大会！（前編）（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第二十六話 ポケモンなりきり大会！（中編）

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオは途中ある町で開催されているポケモンなりきり大会に参加していた。

「さて…盛り上がってまいりましたポケモンなりきり大会…ここからは飛び入り参加の方です！まずはシンオウ地方のフタバタウンから来たマオさん！どうぞ！」

とリンが言うつとステージにマオと体をピンク色に染め段ボールで作った尻尾を付けてエネコになりきったヒコザルが上がってきた。

「これは…いいですけど…。」

とリンが言葉を詰まらせるとマオは

「どうかしたんですか？」

と聞いた。するとリンは

「あのー燃えてますよ…ヒコザルのお尻の炎で尻尾が…。」

と言った。マオがヒコザルの方を向くと確かに段ボールで作った尻尾が燃えていた。

「あちゃー失敗か…。」

とマオが言うつとリンが

「それどころじゃないでしょ！早く消さないと！」

と言うつと近くにあつたバケツの水をかけて消火した。

「あっ！ヒコザル！」

とマオが言うつとリンは

「…とにかく…衣装がなくなつたため…マオさんは失格！」

と言った。マオがステージから降りるとリンは

「次の参加者は…カナズミシティから来たイリスさん…それではどうぞー！」

と言うつと今度はイリスと段ボールや枝などを使ってウソハチになり

きつたりオルがステージの上上がった。

「これは素晴らしいですね！」

と審査員の一人が言うといリスは

(よしっ！これなら…。)

と思っていたがその時壁が突然壊れて大きなメカが登場して商品が入った箱を奪い取る。

「会場に何者かが侵入しました！いったい何者なんでしょうか！」

とリンが言うともカの頭部から三人組が現れ

「いったい何者なんでしょうか！と言われても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやろう！」

とダイキが言うともステージのそばにいたマオが

「とかなんとか言っても結局いつも答えてるじゃない…。」

と言った。するとエリは

「うるさいわね！水を差さないで！仕切り直しよ！」

と言いだいきが

「わかったよ…。」

と言ってから

「仕切り直しよ！と言われても仕切りなおさないのが常識だが…まあ今回ぐらいは…」

と言いだすがマリコが

「変なアドリブはちょっと…。」

と文句を言いだした。するとダイキは

「それもそうだな…それじゃあ改めて…変なアドリブはちょっと…と言われても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやろう！」

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリコ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私達！」

「我ら天下無双の」

「『ロケット団』」

とようやく名乗りを終えた三人組に対しマオは

「またあなた達なの！」

と言った。すると横にいたイリスが

「そのまたあなた達なの！って言うのもだんだんお決まりになってる気が…。」

と言った。マオが

「そうかな…でも前はイリスが言ったじゃない…それにそんなに言っていないし！今回で2回目よ…これは…。」

と答えるとエリが

「でもそんなこと言ってあなたの反応が…なんていつてたら一生終わらないじゃない！とにかくあなたたちのポケモンもついでにいたたくわよ！」

と言うと網のようなものでポケモンたちを捕獲していくと思われたが…

「ピジヨット…つばさでうつであの網を切るんだ！」

と言う声と共にピジヨットが合わられて網を切ってエリたちが捕まえたポケモンを別の網で捕獲して横取りした。

『ピジヨット とりポケモン ピジョンの進化形 美しい羽を広げて相手を威嚇する。マッハ2で空をツビ回る。タイプはノーマル。ひじゅ』

「誰よ！あんた！」

とエリが言うとその人物は

「誰よ！あんだ！と言われたら答えるのがこの世の理」  
と言つともう二人誰かが出てきて

「桜よ！」

「海よ！」

「紅葉よ！」

「世界に届けよこの音楽」

「母なる海の守り神」

「女神か魔女かその名を呼べば」

「誰もが振り返る美しき響き」

「ハルミ！」

「ナツミ！」

「アキナ！」

「実際主役は私達！」

「そんな私たちは」

「『ロケット団』」

と名乗った。

「ロケット団つてまだいたの…。」

とマオが言つとエリが

「ハルミ、ナツミ、アキミ！何の用よ！」

と言った。するとアキナは

「アキミじゃなくてアキナよ！」

と言った。

「つて言うか春、夏、秋と来て冬がないじゃない…。」

とイリスが言つとナツミが

「ふん！そのうち見つけるさ！」

と言った。

「とにかく私たちはそのヘッポコ三人組とは格が違うのさ！それ  
じゃあ帰る！」

と言つと三人組の気球はどこかへ飛んでいく。

「待ちなさいよ！」

とマオが言うとダイキは

「待ちなさいって言われて待たないのがロケット団…それじゃ俺たちもこの辺で…」

と言うとエリが

「何言ってるのよ！横取りされた分を…」

と言いだすがダイキが

「それが…あのマコトとかいうやつこのポケモンを捕まえるために稼いだ分もこのメカにつき込んだから予算が…」  
と意見を述べた。

「うっそ！残しときなさいって…」

とマリコが言うとダイキは

「ごめんごめん…」

と言う

「ごめんでは済まない気が…」

と会話を聞いていたイリスが言うとマオが

「とりあえず…ヒコザル！ひのこ！」

と指示をだしヒコザルが放ったひのこの炎が燃料に引火して結局エリ、マリコ、ダイキの三人組が乗ったメカは爆発した。

「『『やな感じー！！』』」

と言いながら三人は飛んでいきキラーンと星になった。

つづく…

**第二十六話 ポケモンなりきり大会！（中編）（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第二十七話 ポケモンなりきり大会！（後編）

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオは途中ポケモンなりきり大会に参加していたがロケット団にポケモンを奪われてしまった。

「待ちなさいーい！」

とマオが言うのが気球はどんどん高度を上げて上昇していく。

「これは大会の途中にポケモン強盗です！大会の行方はいかに！」  
この状況下で職業柄からかりポートしながら走るリンはリポーターの鏡である…多分。

「これでボスに認めてもらえるわよ！」

とナツミが言うのとハルミが

「それよりさ…アキミ…。」

と話しかけるとアキナは

「アキナだってば！わざとやってない？ところで何？」

と聞くとハルミは

「そういえば…この気球って強度大丈夫か？」

と聞いた。

「それはどういう？」

と言いながら上を見ると突然近づいてきたムクホークに気球に穴をあけられていた。

『ムクホーク もうきんポケモン ムクバードの進化形 自分の体が傷つこうとも攻撃をやめなくなった。とさかの形を気にしている。』

タイプはノーマル・ひこう

「まあ…所詮は気球だし…。」

とアキナ言うとそのムクホークは下のポケモンたちが入った網もちぎってしまった。

「リオル！」

と言いながらイリスがリオルを受け止めるほかのトレーナを大体同じだ。

「こうなったら力づくで！行きなさい！ドガス！」

『ドガス　どくガスポケモン　マタドガスの進化前　体内にいるなどがすがたまっているためまれに大爆発を起こすことがある。　タイプはどく』

ナツミがドガスを出すとハルミとアキナは

「頼みます！ゴルバット！」

『ゴルバット　こうもりポケモン　ズバットの進化形　かみついたら最後死ぬほど血をすいとるため重くなって自分で飛行できなくなる。　タイプはどく・ひこう』

「行ってちょうだい！ベトベター！」

『ベトベター　ヘドロポケモン　ベトベトンの進化前　月からエックス線を浴びたヘドロがベトベターに変化した。汚いものが大好物。　タイプはどく』

ベトベターはボールから出るなり臨戦態勢に入るがゴルバットは180度旋回してハルミにかみついた。

「離れなさいよ！敵はあつちよ！あつち！ゴルバット！エアカッター！」

とハルミが指示を出すとゴルバットはハルミから離れてエアカッターを出した。

「ヒコザル！ひのこ！」

「キルリア、サイコネシス！バシャーモはかえんほうしゃだ！」

「ドガス！たいあたり！」

「ベトベター！ヘドロこうげき！」

と四人がそれぞれのポケモンに指示を出す。それぞれにわざがぶつかり合い爆発した。煙が晴れると立っていたのはゴルバットとバシャーモ、キルリアの三体のみで残りのポケモンたちは倒れていた。

「これで決める！バシャーモ！かえんほうしゃ！」

「これでとどめよ！ゴルバットもう一度エアカッター！」

二体のポケモンの技はぶつかり合いそしてゴルバットをロケット団の方へ飛ばした。ゴルバットがぶつかった衝撃が知らないがロケット団の気球は爆発し三人は飛ばされた。

「『やな気持ちー！！！！』」

と言いながら三人は飛ばされていきキラーンとお星さまになった。事のおさまりを見届けたムクホークは元来た方へと帰って行く。

「なんだっただんだろう？あのムクホーク…。」

とマオが言つとイリスは

「いいじゃないですか！大会に戻りましょう！」

と言つた。すると大会の審査委員長が

「その必要はありません…この大会の優勝者は決まりました…。」

と言つた。イリスが

「えっ？」

と言つと審査委員長は

「今大会でのトラブルにおいてそのさなかでも物まねを続けたリオルのトレーナーであるイリスさんが優勝です！皆さん文句はありませんね？」

と言つた。周りの参加者は一切文句を言わない。それを確認すると審査委員長は

「だったら決まりです！それでは今大会の賞品であるポケモンの卵を差し上げます！大事に育ててください！」

と言いながらポケモンの卵をイリスに渡した。

「はい！」

とイリスが返事をする。審査委員長は

「いい返事だ！」

と答えた。すると自然に周りから拍手が聞こえてきてマオが

「イリス！おめでとー！」

と言つとソウヤを

「俺からもおめでとー！」

と言つた。

そんな様子を近くの草むらから見守る一つの人影

「まったく…マオったら…それにしても見つけたはいいけど…これだけの人が味方とは限らなし敵がいなくても限らないからマオが一人の時に話をするか…。」

と言うと少年はムクホークをモンスターボールに戻し去って行った。

その頃飛ばされていったいつもの三人組は

「くそっ！あの四季トリオめ！」

とエリが言うとマリコが

「でも…今まで気にしなかったけど…冬が確かにありませんね…。」  
と言うとダイキが

「あの三人友達少ないから…。」

と言った。すると上から

「友達少ないってあんたらもでしょ！」

と声が聞こえてきた。三人が上を見るといつの間にか四季トリオが木に引っ掛かっていた。

「お前らも飛ばされたのか？」

とダイキが聞くとナツミが

「そっよー！」

と答える。

「ざまあみなさい！」

とエリが言うとマリコが

「私たちはそれを言える立場じゃないかと…。」  
と言った。

大会の会場の前の道を夕日が赤く照らしている。

「この卵から何が孵るか楽しみですね！」

とイリスが言うとマオは

「早く生まれるといいね！」

と答える。

「さあ！今度こそコトブキシティへ行くぞ！」

とソウヤが言うとマオは

「おー！」

と言って二人と共に歩き出した。

ポケモンの卵をもらったイリス。三人の旅はまだまだつづく…

**第二十七話 ポケモンなりきり大会！（後編）（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第二十八話 ヌウトの話と動き出す陰謀

クロガネジムに挑戦するためにソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオはコトブキシテイにいた。

「着いたね！コトブキシテイ！」

とマオが言くとソウヤが

「お前が方向音痴じゃなかったらもつと早く着いたと思う…。」  
と言った。

「私は方向音痴じゃないわよ！」

とマオが言くとソウヤは

（こつという自覚がない奴が一番厄介なんだよな…。）  
と考えながらため息をついた。

「とにかく私はテレビ局の見学に行こうと思うのですが…マオさんとソウヤはどうしますか？」

とイリスが聞いた。

「俺も行くぜ！」

「私はちよつと他に行きたいところがあるから…。」

と二人がそれぞれ答えるとイリスは

「そうですか…私とソウヤはテレビ局に行きますのでポケモンセンターで会いましょう…。」

と言くとマオは

「わかった…それじゃあまたあとで！」

と言くとマオはソウヤ、イリスが去って行ったのを見てから路地裏に入り

「そこでこそそそ見てないで出てきたら？」

と言った。すると男の子が出てきて

「わかつてたの？」

と聞いた。するとマオは

「ええ…ポケモンなりきり大会のムクホーク…あれあなたのでしょ？それ以降ずっと何者かがついてきた…私に話しかけないってことは私が一人になるタイミングを狙っていたってこと…そうなんですよ？ユウト…。」  
と言った。

「相変わらずのようだね…マオ…。」  
とユウトが言うとマオは

「それで…人目を忍んで何の用かしら？」  
と聞いた。

「それより前にほかの三人はどうしてる？」  
と聞いた。おそらくユキ、マコト、ヒナコの事であろう。

「三人ともフタバタウンの近くで会ったわ…そうそう…マコトがあなたにあつたら僕は元気だ！って伝え置いてって言ってたから伝えるわね…みんな相変わらずよ…ユキはちよつとしたことがあつて引きこもってるけど…。」  
とマオが言うとユウトは

「そうか…それじゃあ本題に入つていいかな？」  
と聞いた。マオがうなずくと

「俺がこの1年何をしてたかつてことなんだが…それを長々と話しているような時間はない…簡単に言つと5年前あの事件を起こした組織が動き出している…俺はそいつらに捕まっていたんだ…とにかく！先生には気を付ける！」

と言った。するとマオは驚きを隠しきれない様子で

「先生つて…あの日に死んだんじゃ？」  
と言った。

「先生も仲間だったんだよ…あいつらの…先生だけじゃない…コハントウンのたくさんの人が表向きには死んだと思われている行方不明者が実際生きたりしてるんだ…これがどういふことかわかるか？」  
とユウトが言った。確かに5年前の事件では死者よりも行方不明者が多く消えた住民の話でシンオウ地方の報道各社を盛り上げさせた。

「つまり…コハンタウンを襲った組織とコハンタウンの住民が結託していた…。」

とマオが言うとユウトは  
「そういうことだ…おそらく行方不明者の大半が奴らの仲間だと思う…。」

と告げた。

「でも…それじゃあ…。」  
とマオが言うとユウトが

「お前の父親やタツヤ兄ちゃんが奴らの仲間だって可能性もあるんだ…マナさんも味方とは限らない…。」

と言うとマオは

「そんな…。」  
と漏らした。

「俺は捕まっていたところから逃げてきたんだ…もしかしたらすぐに見つかるかもしれない…それに捕まったら何をされるかわからない…だから、こいつをお前にあずかってほしいと思って…。」

と言うとユウトはマオに自分が腰につけていたモンスターボールを差し出した。

「これって!」

とマオが言うとユウトは

「ムクホークが入ってる…こいつはおれが旅に出る前からの仲間だしマオにもなついてたしな…こいつのこと頼む!」

と言うとユウトはマオにムクホークの入ったモンスターボールを渡して走り出した。

「ちょっと!ユウト!」

と言ったがユウトは振り向かずどこかに行ってしまった。

「ユウト…。」

と悲しげな表情をしながらマオはつぶやいた。

その頃コトブキシティのテレビ局では

「すごいですね…テレビ局…。」

とイリスが言うとソウヤが

「確かに思っていたよりも大きいな…。」

と答える。それからイリスは周りを少し見てから

「あれって…確か…。」

と言いながら一人の女性を指した。するとソウヤが

「ナオコさんだよな…。」

と言った。

「ナオコさん！」

とイリスが話しかけるがナオコは気づかなかつたのかそのまま行ってしまった。

「行っちゃった…。」

とイリスがつぶやき自動ドアから外に出ようとすると突然シャッターが閉まり外に出れなくなってしまった。

「どうなってるんだ！」

とソウヤが言うと入口のホールに置いてあったテレビに突然一人の男性が映った。

「我々は真の解放を目指す組織カイシン団！このテレビ局は我々が制圧した！繰り返し！このテレビ局は我々が制圧した！これより我々はシンオウ制圧作戦を執行する！これより通常のテレビ放送は中止し我々のシンオウ各地の者どもへ指示および宣伝に使う！現在われらの部隊がシンオウ各地へ向かっている！住民どもはおとなしく我々の部隊の指示に従ってもらおう！」

と男性が言うと放送は終了し、テレビ画面には何も映らなくなった。

この時刻を境に突然シンオウ各地の通信回線が固定回線、衛星回線共に遮断されシンオウ地方から外部への通信が完全に遮断されてしまった。さらに、シンオウ地方は突然各地のリーダーから消え失せてしまい他の地方からシンオウ地方へ向かうこともシンオウ地方から他の地方へ行くこともできなくなってしまった。

そう…現時刻をもってシンオウ地方はこの広い世界から孤立したのだ…。

**第二十八話 ヌウトの話と動き出す陰謀（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第二十九話 シンオウ孤立！それぞれの…

クロガネジムに挑戦するためソウヤ、イリスと共に旅をしていたマオだがシンオウ地方が突然カイシン団を名乗る組織によって孤立してしまった。

コトブキシテイの街頭に設置されたテレビで放送を見たマオは急いでソウヤとイリスがいるであろうテレビ局に向かった。

（ソウヤ、イリス無事でいて！）

と思いながらマオは今にも雨が降り出しそうな雲が広がっていたにも関わらずに雲一つない空に気づくことなくテレビ局があると思いつ込んでいる方向へ走って行った。

ここはジョウト地方のある町。一人の少女がポケモンセンターの入るとなんだかいつもと様子が違っていた。

「どうかしたんですか？」

と少女が聞くとジョーイが

「大変なのよ！つい20分ぐらい前からシンオウ地方と連絡が取れなくなつたの！それだけじゃなくてリーダーからも消えっちゃって…今なんとかシンオウ地方と連絡を取ろうとしてるんだけど…」  
と言った。

「そんな！シンオウ地方へはいけないんですか？」

と少女が聞くとジョーイは

「はい…リーダーからの観測はともかくシンオウ地方周辺での気象状況があまりにも悪くてとても近づけないのよ…」

と答えた。その話を聞いた後少女は近くの公園のベンチに座って

「どうしよう…」

とつぶやいた。すると

「そういつ時こそ大丈夫！じゃねえのか？ヒカリ！」

と声がした。ヒカリと呼ばれた少女が顔をあげるとヒカリの幼なじみであるケンゴが立っていた。

「ケンゴ！」

とヒカリが言うくとケンゴは

「久しぶりだな！」

と言った。するとヒカリは

「そうよね…みんな大丈夫だよね…。」

と言いながらシンオウにいるであろう自分の母親や友人たちを思い浮かべていた。

イツシュ地方で作戦を進行中のロケット団員の三人組（正確に言うると二人と一匹）にも知らせは届いた。

「シンオウ地方が孤立か…。」

とムサシが言うくとコジロウは

「そういえばあいつら確かシンオウに行ってたな…。」

と言いながら自分がイツシュの任務に向かう際に自分たちが愛用した気球を託した三人組を思い浮かべている。

「とりあえず任務に集中するのによ。」

とニヤースが言うくとムサシは

「そうね…。」

と答えて三人は次なる作戦の準備に向かった。

ふたたびシンオウ地方コトブキシテイ…

マオが走っているとユウトらしき人影を見つけ

「ユウトー！」

と言った。するとユウトは振り返り

「マオ…。」

と言った。マオが

「ユウト…これやってるのもユウトが言ってた…。」

と言うとユウトは

「…わからない…でももし奴らだとしたら誰が敵で誰が味方か…。」  
と言った。するとマオは

「だったら…この人なら絶対大丈夫って人だけ集めてみよう…。」  
と提案した。

「それも…そうだな…。」

とユウトが言うとマオは

「それじゃあ…さっそく行こうか…。」

と言ってからユウトとともに歩き出した。

「まずはどこに行くんだ？」

とユウトが聞くとマオは

「とりあえずユウトに会う前にテレビ局に行くって言ったソウヤ  
とイリスを探さないと…とりあえずテレビ局へ…。」  
と言くとユウトは

「テレビ局は反対側だし…それにやめておいた方がいいと思うよ…  
今のテレビ局は奴らの拠点になっているし奴らだとしたらコハンタ  
ウンの生き残りの中で自分らの味方でない人を探すはずだから自ら  
捕まりに行くようなものだよ…それよりほかにいないの？」  
と聞いた。

「それじゃあ…ヒナコ達は？たぶんまだシンオウにいると思うけど  
…。」

とマオが言うとユウトは

「そうだな…一旦フタバタウンへ向かおうか…。」

と言うとユウトはフタバタウンの方へ歩き出しマオはそれに続いた。

(ソウヤ…イリス…ごめん…絶対助けるから…。  
)と思いつながらマオは歩いていった。

二人がコトブキシテイを立った直後コトブキシテイはカイシン団  
の手に落ちた。マオ達を追っていたこの三人組もシンオウ地方の異  
常を感じていた。

「いったいどうなったの？本部に連絡が取れないわよ！」

とエリが言つとダイキは昔自分で作った特殊な電波を使う通信機を  
取り出して

「これならなんとかると思うけど…。」  
と言いながら動かしたがまったく動作しない。

「これが動かないってことはシンオウ地方のありとあらゆる電波は  
カットされたつてことだ…。」

と言つた。マリコが

「どういうことですか？」

と聞くとダイキは

「この通信機は一般の衛星通信じゃなくてロケット団が打ち上げた  
特殊衛星を経由してるんだ…それが切れるつてことはこれをやって  
いるのはただ事じゃないね…。」  
と言つた。

「それにしても…どうするのよ…本部とも連絡取れないし…。」

とエリが言つとダイキは

「それは電波が回復するのを待つしかないけど…。」

と言いながら空を見上げる

「どうしたんだ？」

と言いながら空を見上げると

「これは…。」

とつぶやいた。するとマリコが

「いったいどうなってるんでしょうか…。」

と空を見上げながら言つた。するとナツミがやってきて

「あら…作戦を展開する土地の事を詳しく知らないなんてね…。」  
と言つた。

「あなたにはわかるわけ？だったら教えなさいよ！」

とエリが言つとハルミは

「ものを頼む態度ではないのでは？」

と言いながら現れた。それから少し間を開けてから

「教えてください！」

とエリが頼むとナツミは

「今回の事を引き起こしているのはカイシン団と言う組織…彼らは真の解放を目指すと言っていた…私たちもその意味がよくわからなかったけど…この空を見てはつきりしたわ…私の推測の域を脱しないけど…おそらく奴らの目的は…」

と言った。エリが

「目的は？」

と聞くとナツミはカイシン団が目的としているであろうことを三人に告げた。

つづく…

**第二十九話 シンオウ孤立！それぞれの…（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

### 第三十話 ヒナコの思いとマコトの考え

コハンタウンの事件の生き残りのうちの一人で今はフタバタウンを訪れていたマコトとヒナコはユキの家を訪ねていた。

マコトが玄関のチャイムを押すとユキの母が出てきて

「どうしたの？マコトちゃんにヒナコちゃん…。」

と言うとマコトは

「ユキさんと会いたいんですけど…。」

と言った。するとユキの母は

「駄目よ…あの子、部屋から出ないもの…。」

と言うとヒナコは

「ドア越しでも構いませんから！」

と言ったがユキの母は

「それもちょっと…。」

と言いながらドアを閉めてしまった。

「なかなか会えないね…ユキちゃん…。」

とヒナコが言うとマコトは

「なあ…おかしくないか？」

と言った。

「何が？」

とヒナコが聞くとマコトは

「普通ならたとえでなくても友達とあわせたら出で来るかもしれないって期待するんじゃないか？でもそんな行動がまったくなかった

…まるで僕たちと会ったら都合が悪いかのようにな…。」

と言った。

「考えすぎじゃない？」

とヒナコは言うがマコトは

「いや…考えすぎではないと思う…少しついてきてくれないか？行

きたいところがある…。」

と言つとマコトは歩き出した。

「うん…。」

と言つとヒナコはそれに続いて歩き出した。

マコトとヒナコはフタバタウンを出るとシンジ湖の方へ向かった。

「シンジ湖なんて行ってどうするの？」

とヒナコが聞くとマコトは立ち止まり

「…シンジ湖じゃないよ…もっと西だ…。」

と言つと再び歩き出した。

「もっと西つて…コハンタウンに行くの？」

とヒナコが聞くとマコトはうなずいた。

二人はかつてコハンタウンがあつた場所に来るとマコトは適当なところに座つて

「さてと…ヒナコ…とりあえずその辺座つてくれ…。」

と言つた。

「どうしてコハ<sup>ここ</sup>ンタウンに来たの？」

とヒナコが聞くとマコトは

「いいか…これから話すことは僕が旅しているときに聞いた話や現在の状況についてなんだけど…この話はまだまだ推測の域を出ない…でもかなり可能性は高いと思うんだ…。」

と前置きするとマコトは

「まず…5年前にコハンタウンを襲つた集団だけど…今日までのユウさんの様子からおそらくユウさんも今回の騒動や5年前の事件を起こした集団の仲間だと思ふんだ…。」

と言つとヒナコが

「でも！ユウさんは…。」

と言つとマコトは

「僕が集めた情報だと…今回の騒動を起こしている奴らの常とう手

段はおそらく相手の内部に味方を作って作戦が進行しやすくする…  
このことから5年前の事件もカイシン団が起こしたとみて間違いないと思うんだ…だから事件当時コハンタウンにいなかった人や行方不明になっていまだ死亡が確認されていない人は奴らの仲間だと考えていいと思う…。」

とマコトが言うとヒナコは

「それだと…マナさんや先生、タツヤ兄ちゃんもあいつらの仲間かもしれないってことなの？」

と言うとマコトは

「多分な…でもこれはあくまでも推測だったんだけど…今日までの事でユウさんも仲間の可能性があるな…。」

と言った。ヒナコが

「だったらどうするの？」

と聞くとマコトは

「あんまりこういうことはやりたくないんだけど…。」  
と言いながら立ち上がりヒナコに自分の考えを説明した。

夜二人はユキの家の前に立つとヒナコが

「ほんとうにやるの？」

と聞いた。するとマコトは

「まあな…。」

と言いながらモンスターボールを手にした。

「わかったわ…マコトは本気なわけね…。」

と言うとヒナコもモンスターボールを手にした。

「それじゃあ行くか！」

と言うとマコトはリザードン、ヒナコはカイリューを出した。

『カイリュー ドラゴンポケモン ハクリューの進化形 大きな体格で空を飛ぶ。地球を約16時間で1周してしまう。タイプはドラゴン・ひこう』

マコトとヒナコはそれぞれリザードンとカイリューに乗ってユキの

部屋がある二階へ飛んだ。二人はユキの部屋の窓をたたくと眠そうな顔をしたユキが顔を出した。

「ヒナコちゃんに…マコト…?」

とユキが言うとマコトは

「久しぶりだな…ユキ…さっそくで悪いが…僕のリザードンに乗ってくれないか?」

と聞いた。ユキが

「外に出るなら…お母さんに話さない」と…。」

と言うとマコトは

「いや…ユウさんには話さないでくれるか?さすがに部屋の中にもお前を俺らが連れ出そうとしてユウさんに止められてることもシンオウで今何が起こっているかも知ってるだろ?」

と言った。するとユキは

「お母さんが二人を追い返したって?そんなはずなのに…一回マオちゃんが来たのは知ってるけど…。」

とユキが言うとヒナコは

「今このシンオウで何が起きてるかも知らないの?」

と聞いた。ユキがうなずくとヒナコは

「それじゃあ…マコトが言ったことって…。」

と言うとマコトは

「悲しいけど…事実だったみたいだな…。」

と言った。

「事実って何が?もしかしたら…お母さんが悪い人の仲間とか…でもいくらなんでも知れは…。」

とユキが言っているとユキの部屋のドアが開きユウとストライクが現れた。

『ストライク かまきりポケモン ハッサムの進化前 忍者のような素早さで移動するためあまりに早く動いたときは何匹もいるように見える。タイプはむし・ひこう』

「…お母さん?」

とユキが言うとユウは

「…ストライク…この場にいる私以外全員にきりさく攻撃…。」  
と指示を出した。

「お母さんどういっつもり!」

とユキと言いながらユウに近づこうとしているユキの手をつかみマコトは半ば強引に自分のリザードンにユキを乗せて飛び立った。

「危なかった…。」

とマコトが言うとユキは

「いったいどうなってるの?」

と聞いた。するとマコトは

「これから話すことは僕の推測も入ってるけど…今回の事でかなり確信がつかめた…落ち着いて聞いてほしい…。」

と前置きするとマコトはユキに今回の事件について話し始めた。

つづく…

第三十話 ヒナコの思いとマロトの考え（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

### 第三十一話 テレビ局の中で…

クロガネジムに挑戦するためマオ、ソウヤと共に旅をしていたイリスは途中コトブキシテイで起こったカイシン団を名乗る組織が起こした事件に巻き込まれてしまった。

テレビ局の中はカイシン団の団員による見張りがあるとはいえ幾分か自由に動けたし拘束されたりと言うことはなかった。

「これからどうなるんでしょうか…。」

とイリスが言うとソウヤは

「さあ…でもここでおとなしくしてれば何とかなるんじゃないか?」  
と言った。

「外にいるマオさんですよ…あの内容だとおそらく何らかの作戦が進行してるはずですし、マオさんが無事ならいいんですけど…。」

とイリスが言うとソウヤは

「大丈夫だよ…きっと無事だよ…。」  
と言った。

「ちよつとトイレ行ってくる…。」

と言うとソウヤはその場を去って行った。

「マオさん…。」

とイリスがつぶやくと近くにいた女性が近くに座り

「そのままの向きで小さな声で話して…。」

と言った。

「えっ?」

とイリスが言うとその女性は

「あなた…外に出たくはない?」

と聞いた。

「ええ…できるなら…。」

とイリスが答えるとその女性は

「…私が出してあげるわ…外に…私が推測するに現在外はこと似たような状況だと思ふの…おそらく彼らはこれから名簿のようなものを作成して自分たちで決めた範囲でしか移動できないように制限すると思ふわ…だから脱出するなら今がチャンスなのよ…ただ秘密保全の観点と私の身の安全を保障するためにこのことをほかに人に話してはいけないし、内容を聞いたうえでやっぱりやめた！なんていうのはなしね…もしもそんなことがあったらあなたの命はないと思つてちようだい…とはいつてもこの事件が収集するまでだけ…ここまで聞いて私の話に乗る気はある？そうそう…言い忘れたけど外に出るならやつてもらいたいことがあるからそれも頼めるかしら…できるなら私が出たかつたんだけど私は顔を知られちゃつてるだろうから…」

と言つた。するとイリスは  
「あの…このテレビ局の中に一緒に旅をしている仲間がいるんですが…。」  
と言つとその女性は

「残念だけど…確実性を追求したいからあなた一人の方がいいのよね…。」  
と言つた。

「そうですか…。」  
とイリスが言つとその女性は  
「その人の事が大切なのね…お友達？」

と聞いた。するとその時ソウヤが戻つてきた。  
「今こつちに来ている男の子？」  
と言つとイリスは

「はい…。」  
と答えた。

「少し場所を変えましょう…あの子にはなんか適当に行つてこの場を離れて…。」  
と言いながらその女性が立ち上がるとイリスはソウヤに

「少しこのあたりの様子を見てくるわ…。」  
「と言うと自分もついていくというソウヤを何とか座らせて歩き出した。」

廊下に出ると女性は

「そういえば自己紹介がまだだったわね…私はフユミ…カントー地方のマサラタウン出身よ…。」  
と名乗った。

「私はホウエン地方のカナズミシティ出身のイリスです…。」  
とイリスが名乗るとフユミは

「イリスちゃんね…ところでさっきの話のつづきなんだけど…あなたはあの子を見捨てる覚悟がある？」と聞いた。

「ソウヤを…ですか？」

とイリスが言うつとフユミは

「あの子ソウヤって言うの…まあそんなところかな…。」  
と言った。イリスが黙ってしまうつと

「ほんと大事なのね…あの子が…恋人か何かなの？」

とフユミが聞いた。

「恋人だなんて！」

とイリスが大きな声で言うつとフユミはクスツと笑いながら

「顔が真っ赤よ！あの子のこと好きなんだ！」

と言つてから

「話を戻すけど…あなたが行った後は私があの子を守つといてあげるわよ…そうそう心配しなくても私は年下の男の子には手を出さないから！」

と言つた。

「ところで…何で私に話しかけたんですか？」

とイリスが聞くとフユミは

「…それはね…なんだかあなたから強いオーラが感じられたのよ…正義感の強いね…カイシン団のやり方は主に敵の中に自分たちの仲

間をたくさん作って味方にする…だからあなたほどの正義感がある人間なら大丈夫かなって思ったのよ…それで…私の事を信用して脱出する？この建物から…決断は早くしないとややこしいことになるわよ…。」

と言った。

「…私は…外に出ます！ソウヤの事お願いします！」

とイリスが言うつとフユミは

「そう！よく言ったわね！だったら外に出る方法なんだけど…まあ変なことやるより地味に換気用のダクトから出るといいと思うのよ…あなたなら大丈夫そうだし…それと…私からの頼みことなんでしょう…外に出るならこれ持って行って！」

と言いながらポケギアを渡した。

「ポケギア…ですか？」

とイリスが聞くとフユミは

「ただのポケギアだと思ったら大間違いよ！これはある特殊回線を經由しているから外部との連絡は取れなくてもこの地方内にいれば通信可能よ！」

と誇らしげに言った。

「はあ…それで私はどうすればいいんですか？」

とイリスが聞くとフユミは

「脱出の途中で見つかった時のために私の頼み事の内容はあなたが外に出るから私が指定する場所についてからね…ポケッチカンパニ…って言う会社知ってる？」

と言った。

「はい…ポケッチの製造、開発をしている会社ですよね？」

とイリスが言うつとフユミは

「その会社の社長と私のお父さんが仲がいいからそこに行ってもらわ…あその会社は家族経営だし奴らに加担してシンオウの制圧をするわけでもないだろうから…そこを拠点に活動するといいわ…。」

「

と言つとフユミはテレビ局からポケッチカンパニーまでの地図を渡して。

「おそらくそのポケギアを見せれば私の知り合いつてわかつてもらえるわ…この事態だし私がそれ越しに説明すれば何とかなるから…」

「

と言いながら歩き出した。

「どこから出るんですか？」

と聞きながらイリスが歩き出すとフユミは

「それは…私についてくれば分かるわ…」

と言いながら廊下を進んでいった。

つづく…

第三十一話 テレビ局の中で…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

### 第三十二話 命運をかけた戦い ナオコVSフユミ

コトブキシティのテレビ局でイリスを脱出させるためフユミはイリスと共に放送などで使う大道具が置いてある倉庫に来ていた。

「ここからなら安全に出られるはずよ…ポケッチカンパニーについたら連絡頂戴…ただ…私が出なかったら何かあったと思ってそのままだどこかに逃げて…わかった？」

とフユミが言うといリスは

「はい…。」

と答えた。するとフユミは

「あなたの仲間の事も私の事も心配しないでいいわよ…きっとまた会えるわよ…だって世界は広くても一つしかないんだから…。」  
と言った。

「そうですね!」

と言うといリスはダクトの中に入って行った。

「これでよし…。」

とフユミが言うその後から

「相変わらずね…あなた…。」

と言う声がした。フユミが振り向くと後にいた女性が

「久しぶりじゃない…まさかこんなところであなたと会うとは思わなかったわ…。」

と言った。

「ナオコ!どうしてこんなところに?」

とフユミが言うとなオコは

「決まってるじゃない…私は現在進行している作戦の責任者…まあ一番重要な計画はボスであるトモアキ様が直々にやってるけど…あなたこそいつの間になんな立場になったわけ?」

と言った。

「あら…10年も会ってないうちに結構変わったのね…私の立場がどうなってるかどうやって知ったの？」

とフユミが聞くとナオコは

「結構甘いわね…国際警察にも私たちの仲間がいるのよ…その人物からあなたの事を聞いたわ…国際警察でエリート中のエリートだった…。」

と答えた。

「そうなの…結構あなた達の手が回っているものね…。」  
とフユミが言くとナオコは

「あなた達が甘いよ…さて…選択肢は二つ…一つはここで私とポケモンバトルをする…あなたが勝ったらこの事は見逃してあげるわ…私が勝ったら…わかっているわよね？もう一つは…ここで潔く降参するか…それならあの女の子をあなたも悪いようにしないわ…。」  
と聞いた。

「決まってるじゃない！選択肢は前者！一対一のシングルバトルでどうかしら？」

とフユミが言くとナオコは不敵な笑みを浮かべ

「そうしましょうか…でもどうなっても知らないわよ…それでは行きなさい！アブソル！」

と言いながらアブソルを出した。

「ふーん…アブソルか…確かホウエン地方のポケモンだったわね…頼んだわよ！クロバット！」

と言いながらフユミはクロバットを出した。

『クロバット こうもりポケモン 後ろ足が発達して羽に変わった。手足の羽を交互に休ませながら羽ばたけば1日中休まず飛べる。タイプはどく・ひこう』

「先行はそっちからでいいわよ…。」

とフユミが言くとナオコは

「それじゃあ遠慮なく行くわ…アブソル！サイコカッター！」

「クロバットかわしてどくどく！」

アブソルのサイコカッターが迫るがクロバットは持ち前の素早さで軽々とかわしてどくどくを放った。

「アブソル！よけて！」

とナオコが言うが一步及ばずどくどくはアブソルに命中した。

「状態以上で体力を削って行くいやらしい戦法は相変わらずね…10年前と一緒じゃない…」

とナオコが言うがフユミは

「それはどうかしら？クロバット！ベノムシヨック！」

と指示した。毒状態のアブソルにさらにベノムシヨックが命中する。

「ベノムシヨックって…まさか！」

とナオコが言うがフユミは

「そう…そのまさかよ…ベノムシヨックは相手が毒状態の時技の威力が二倍になるの…だから今の攻撃でアブソルはかなりのダメージを受けたはずよ…。」

と説明した。

「まだまだ…アブソル！立って！」

とナオコが言うがフユミは

「もう無理じゃないの？ナオコならわかるはずよ…10年前…私達が最後に会った時もナオコは何よりも自分のポケモンを大切にしていた…ポケモンたちをそれにこたえようと信頼を寄せていた…でも…今のナオコは違う…どうしてそうなったのよ！私…10年前の事ずっと後悔してた…なんでもっと旅を続けたいって主張しなかったの…か…ずっと後悔してた…だから！ナオコに会えたら最初に謝ろうと思ってた！私は20年前…ナオコの気持ちも考えずにあっさり…と夢をあきらめて…故郷に帰ってしまった…でもね…実はあの日に知り合った人が私の夢を代わりにかなえてくれるって言うから…それで勝手に自分の気持ちに結論を付けていた…ごめん！あの時私が…もつとちゃんとしてれば…」

と言いながら頭を下げた。

「もついいわよ…今頃謝って済む問題じゃないわ…あなたに裏切ら

れてからの10年間私がどんな思いだったかわかるの？まあいいわ…とにかく私は負けたんだし…約束通り今回の事は見なかったことにするわ…でも次はないわよ…。」

と言うとナオコはアブソルをモンスタールに戻して立ち去って行った。

一方その頃イリスは

「どこまで進めばいいんでしょうか…。」

と言いながらダクトの中を進んでいくと下から光が漏れていた。イリスがのぞくとそのすぐ下で男性が電話で話していた。

「ええ…もちろんです…時のかなた計画は間もなく実行段階へ移ります…もちろんですとも…抜かりはございません…。」

と言うと男は電話を切って立ち上がった。

「時のかなた計画？いつたい何なの？」

とイリスが考えていると男のもとに髪の毛の長い女性がやってきた。

「トモアキ様…よろしいでしょうか？」

と女性が言うとトモアキと呼ばれた男は

「なんだ？」

と聞いた。

「はい…シンオウの制圧が完了いたしました。」

と女性が報告するとトモアキは

「そうか！それで…あいつはどうしている？」

と聞いた。

「ナオコ様は仮眠室にてお休みになっていますが…。」

と女性が言うとトモアキは

「そうか…私は少し用があるからここを離れる…ナオコが起きたらよくやったと伝えてくれ…。」

と言うと部屋の扉の方へ歩いていき女性もそれに続いた。

(こんなことしてる場合じゃない…早くここから出ないと…。)

と思うとイリスはダクトの中を進んでいった。

...^UU

第三十二話 命運をかけた戦い ナオコVSフユミ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

### 第三十三話 すべてはあの時より…

いまから22年前カントー地方のマサラタウンから二人の少女が旅立った。二人の名前はナオコとフユミと言った。この時二人はずっと一緒に旅をしようと約束をしていた。二人はこの時はこの約束は守られるものだと思っていた。

20年前のあの日までは…

20年前…

「これにてポケモンリーグセキエイ大会を閉会いたします…。」  
と言うポケモンリーグ協会会長のあいさつが終わり参加していたトレーナーや観客たちがどつと会場を後にする。

「惜しかったね…あともう少しでベスト16になれたのに…。」  
とその中の一人の少女が言うそばにいたもう一人の少女が  
「さあて…フユミ！こうなったら選択肢は二つ！一つは…別の地方の大会に出場するか…もう一つはもう一度この地方の大会に出場するか…。」

と言った。するとフユミと呼ばれた少女は

「ごめん…ナオコ…選択肢は前者でも後者でもないんだ…。」  
と言った。

「どづいつことよ？」

とナオコと呼ばれた少女が言うつとフユミは

「実はママにこの大会でベスト16に入れなかったら旅をやめて家に帰ってきなさいって言われてるの…。」  
と言った。

「それじゃあ…。」

とナオコが言うつとフユミは

「そう…選択肢はその他…私は家に帰るわ…このまま…。」

と言つと

「少し一人にさせて…。」

と言つと走って会場から少し離れた広場の方へ行つた。

「フユミ…。」

と言つナオコのつぶやきは会場を包んでいる夕闇に消えた。

公園のベンチにフユミが腰かけていると一人の少女が来て

「どうかしたの？しよぼくれた顔して…。」

と言いながら話しかけた。

「あの…あなたは？」

とフユミが聞くとその少女は

「ごめんなさい…突然話しかけたりして…私はマナって言うの…シンオウ地方から来たのよ…。」

「シンオウですか？」

とフユミが言つとマナは

「ええ…私ねお父さんの仕事の関係でシンオウ地方のあっちこっちに行つてるのよ…それでどうせ旅に出るならほかのところに行つてね…それでカントー地方に来たの…。」

と言つた。

「そうなんですか…すごいんですね…マナさんは…私はこの大会でベスト16になれなかつたら家に帰るって約束で…それで…。」

とフユミが言つとマナは

「そうなの…。」

と言つてから立ち上がり

「だったら…私があなたの代わりに夢かなえてあげましょうか？」

と聞いた。フユミが

「えっ？」

と言つとマナは

「それがね…こっちに来たのはいいんだけど…何しようか悩んでて

ね…だったらいつそのこと人に夢をかなえるのもいいかな？って思ったのよ…。」

と言った。するとフユミが

「そうですか…だったらお願いできますか？私の夢はトップコーデイネーターになりたいんです…。」

と言った。

「それがあなたの夢なのね…だったら私は今度開催されるコンテストに出場するわ…楽しみにしててね！」

と言つとマナは去って行った。

この時フユミはこの少女のちにシンオウの奇術師などと言つ二つ名で呼ばれるトップコーデイネーターになるとは考えもしなかった。

一方その頃会場に一人残されたナオコはポケモンセンターへと向かった。

(フユミ…ずっと一緒に旅しようって言ったよ…なのに…。)

と考えながらふと目を横にやると旅行代理店の店頭でシンオウ地方への観光ツアーのポスターが貼ってあった。

「シンオウか…。」

とナオコが言いながらため息をついていると突然後ろから近付いてきた自転車に持っていったバックをひったくられてしまった。すると近くにいた変わったポケモンを連れたトレーナーが

「ツタージャ…つるのむちであいつを捕まえる…。」

と言った。ツタージャはつるを伸ばしてひったくりからナオコのカバンを取り返した。

「ありがとうございます…。」

とナオコが言つと少年は

「別にいいですよ…当然のことをしたまでです…。」

と言つてからその少年は

「僕はトモアキ！」

と言った。するとナオコは

「私はナオコです…。」

と名乗ってからツタージャにポケモン図鑑をかざした。

『データなし』

「えっ！データなしなの！」

とナオコが言うとトモアキは

「まあツタージャはイッシュ地方のポケモンでカントー地方では珍しいからな…。」

と言いながらツタージャをなでている。

「へえー」

とナオコが言うとトモアキは

「ところで…これからカントーやジョウトと言った各地を旅したいんだけど…一緒に来てくれないか？」

と聞いた。するとナオコは少し考えてから

「さあて…選択肢は二つ…一つはぶらぶらと一人旅…もう一つはフユミを説得して何とか旅を続ける…って考えてたけど…私もたまにはその他！あなたと旅するわ…どうせなら一緒にジョウト地方のジムを回らない？」

と言った。するとトモアキは

「それじゃあそうしましょうか…ナオコさん…。」  
と言いながら歩き出しナオコもそれに続いた。

フユミがポケモンセンターへ行くとジョーイさんからナオコがジョウト地方へと旅立ったということを聞いた。フユミはポケモンセンターのトレーナーが宿泊するための個室の中でベットにあおむけに寝そべった。

（ナオコ…ナオコは旅を続けたかったんだよね…なのに私は…ママに言われたからって最初からあきらめていた…ナオコごめんね…でも絶対どこかで会えるよね…必ず…だって世界は広いけど一つしか

ないんだから…その時は…。)  
と考えながらフユミは深い眠りについた。

この日を境に二人の少女は連絡を絶ってしまった。この後二人がシンオウ地方で再会するまでの間お互いどのような過ごしをしているか知るよしもなく二人の距離は離れて行った…。この時始めて二人の間にできた小さな溝はのちに二人の少女が再会するころには大きな亀裂になっていたのだ…。

つづく…

第三十三話 すべてはあの時より…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

### 第三十四話 マオの秘密

カイシン団によるシンオウ制圧作戦が始まりマオはユキやマコト、ヒナコと合流するためにユウトと共にフタバタウンへ来ていた。

「何とかついたわね…。」

とマオが言つとユウトは

「これからだよ…どこかで落ち合うとかそついう話じゃないからこのへんにいない可能性もあるからね…。」

と言つた。

「どうやって探すの？あいつらの手がもうすでにまわってるみたいだけど…。」

とマオが言つとユウトは

「一旦二手に分かれて様子を見よう…俺は何か中に入れてみるからマオは湖の方へ行ってくれないか？」

と聞いた。

「わかつた…。」

と答えるとマオは湖の方へ歩き出した。

マオが道に迷いつつシンジ湖へたどりつくとシンジ湖畔にマナが立っていた。

「ママ？」

と言いながらマオが近づくとマナは

「マオ…あなたの事だからきつとここへ来ると思って待ってたの…。」

「

と言いながら近づいてきた。

「ママ！」

とマオが言つとマナは指を立てて

「あまり大きな声出さないで…それから…これから私が話をするけ

ど…落ち着いて聞いてちょうだい…。」  
と言った。

「話？」

とマオが言うとマナは

「ええ…。」

と言ってから少し間を開けて

「この話は今よりずっと昔…シンオウ5ヶ年戦争のころまでさかのぼります…。」  
と言った。

「シンオウ5ヶ年戦争って…教科書に載ってる？」

とマオが聞くとマナは

「その通りよ…この聖戦はマオが学校で習った通り派閥争いが発端だった…その派閥は主にニシユキ一派とタツムロ一派…。」

と言つとマオは

「確か…両者が和解して集結したんだよね？」

と聞くとマナは

「表面的にはね…。」

と言った。

「どういふこと？」

とマオが聞くとマナは

「和解したと思われていた両者だったんだけど…気づけばタツムロ一派の人間は次々原因不明の病や不可解な事件に巻き込まれてついにはタツムロ一派の頭であるタツムロトウゴロウも死んでしまった…そして気づけば五人しか残っていなかったの…そして…五人の名前はヒイラギマコ、サムゾラユウリ、ナナシマヒメユキ、ナカシマタツミ、タチカワユウカ…。」

と言った。マオが

「ヒイラギ、サムゾラ、ナナシマ、ナカシマ、タチカワってまさか…！」

と言つとマナは

「そのまさかよ…五人は身の危険を感じ王宮から逃げてシンジ湖の近くに町を作った…それがコハンタウンよ…。」

「と言うとマナは常に服に付けている桜の花の形をしたかざりを外して「現時刻をもってヒイラギマオをヒイラギ家の正式なる後継ぎと認めこれを授ける…これは大変重要な物のため肌身離さず身に着けるように！」

「言いながらそれをマオの胸元に付ける。

「重要って…いったいどういうことなの？」

とマオが聞くとマナは

「説明している暇はないわ…奴らが捜しているのはタツム口派の生き残り…だから早く逃げて！」

と言うがマナは

「だったらママだって危ないじゃない！早く行かないと！」

と言った。

「私はここを離れるわけにはいかないの…だから…マオ…早く行きなさい！」

と言いながらサーナイトを出した。

『サーナイト ほうようポケモン キルリアの進化形 サイコパワーで体を支えているため重力を感じていないらしい。トレーナーを守るために命をかける。タイプはエスパー』

「サーナイト…さいみんじゅつ…。」

とマナが言うつとサーナイトはマオにさいみんじゅつをしてマオを眠らせた。

「マオ…。」

と言うとマナはサーナイトの方を向き

「サーナイト…テレポートでできる限り遠くへマオを運んで…。」  
と言うとマナはマオのバックにサーナイトのモンスターボールを入れて

「サーナイト…くれぐれもマオをよろしく…。」

と言って少し離れた位置に立った。サーナイトがテレポートをした

のを確認するとマナは

「そこにいるんでしょ…出てきなさい…」  
と言った。

「ばれてたのね…。」

と後ろの茂みから出てきたユウが言うとマナは

「ええ…あなたはその立場でありながら我々を裏切った…これが何を意味するか分かってるの？」

と聞いた。

「わかってるわよ…でもあんたらの考え方は古すぎるわ…そうそう…あれはユキに渡してあるわ…。」

とユウが言うとマナは

「なるほど…それぞれ娘に継がせたもの同士ってわけ…。」  
と言った。

「その通りよ…まっ正式な感じでやったわけじゃないけど…あんたみたいに…。」

とユウが言うとマナは

「それじゃあ…我らに背いた罰…受けてもらおうかしら…。」

と言いながらモンスターボールを握る。

「古い風習にいつまでもとらわれてるあんたとの違い見せるんだから…！」

と言いながらユウをモンスターボールを手に持った。

その頃サーナイトのテレポートでどこかに飛ばされたマオが目覚めるとどこかの天井が視界に入った。

「ここは…?」

と言いながらマオが起き上がると横に座っていた女性が

「あら…目覚めたの?よかった…。」  
と言った。

「ここはどこですか?」

とマオが聞くとその女性は

「ここはトバリシティよ…。」  
と答えた。

「トバリシティ…結構遠くまで飛ばされたのね…。」  
とマオが言うと女性は

「まったく…家の前で倒れてたからびっくりしちゃった…ところであなたはどこから来たの？」  
と聞いた。

「私は…フタバタウン出身のマオです…。」  
とマオが言うと女性は

「私はここトバリシティ出身のリカコって言うの…よろしくね…。」  
と自己紹介した。

「リカコさんですか…。」  
とマオが言うとリカコは

「ところで…何で家の前に倒れてたの？」  
と尋ねた。

「ええ…まあ…。」  
とマオが口ごもっているときリカコは

「別に話したくないならいいわよ…。」  
と言って部屋から出て行った。

つづく…

第三十四話 マオの秘密（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1484x/>

---

遙かなる旅

2011年12月2日05時45分発行